

社会・環境報告書

Social and Environmental Report 2007



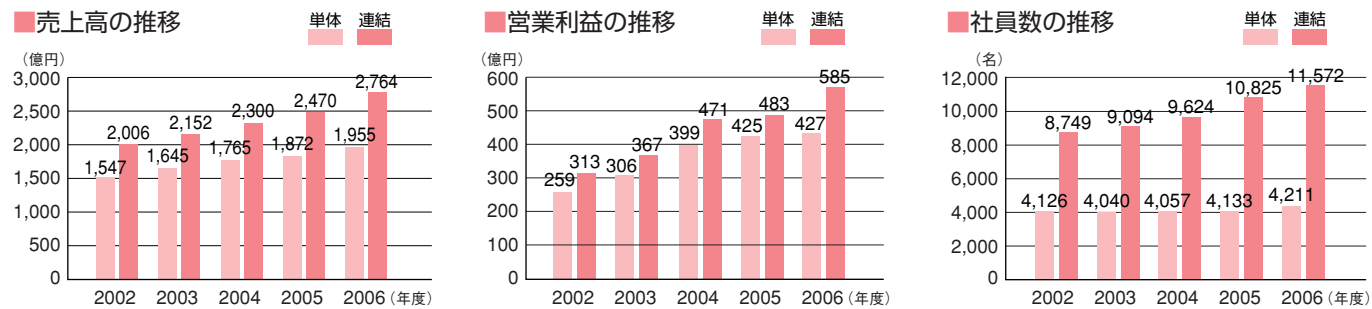
事業概要

テルモの製品は世界中で生産・販売され、世界150カ国を超える国々で使われています。
 テルモは、今後も医療を通じて世界に貢献していきます。

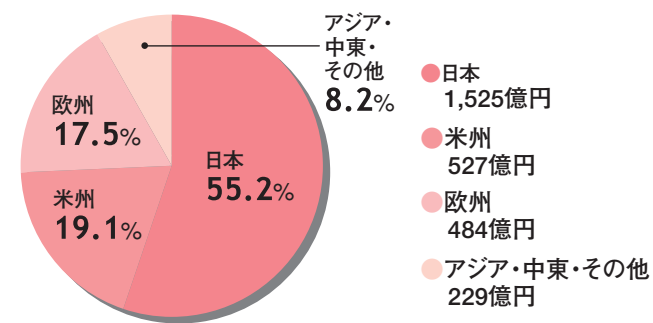


会社概要

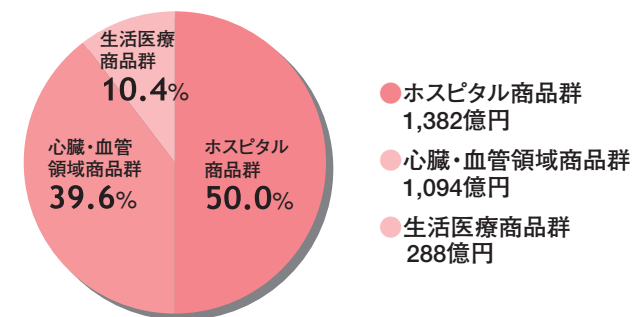
名称:テルモ株式会社
 設立:1921年9月
 資本金:387億円
 連結売上高:2,764億円(2006年度連結)
 代表者:代表取締役社長 高橋 晃
 社員数:4,211名(テルモグループ11,572名:2007年3月末)
 本社所在地:〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-44-1 03-3374-8111(代)
 事業内容:各種使い切り医療機器、医薬品・栄養食品、血液バッグ、人工心臓システム、カテーテルシステム、人工血管、
 腹膜透析関連、血糖測定システム、ME機器、電子体温計などの製造・販売
 株式:東証一部上場



■地域別売上高(2006年度連結)



■セグメント別売上高(2006年度連結)



CONTENTS

事業概要	1
トップメッセージ	3
企業理念	5
「人にやさしい医療」の実現に向けて	6
特集 人にやさしい医療を具現化する ～総合医療トレーニング施設 「テルモメディカルプラネックス®」～	7
■マネジメント■	
CSRパフォーマンス(目標と実績)	11
コーポレート・ガバナンス/内部統制	13
コンプライアンス	14
■社会報告■	
品質への取り組み	15
お客様とのかかわり	16
社員とのかかわり	19
社会とのかかわり	21
■環境報告■	
環境マネジメント体制	23
環境コミュニケーション/環境監査	24
事業活動・物質フロー	25
環境に配慮した製品	26
地球温暖化防止	27
化学物質管理	28
廃棄物の削減/水使用量の削減	29
海外事業所の取り組み	31
グリーン調達・購入	33
第三者意見	34

「人にやさしい医療」を追求し、社会に貢献します。

「人にやさしい医療」を目指して

「医療を通じて社会に貢献する」。それが、テルモが1921年の創立以来、変わることなく受け継いできた企業理念です。1960年代には、感染症を予防するため、国産では初めてディスプレイ注射器・注射針を発売、その後も国産初となる血液バッグやソフトバッグ入り輸液剤を発売するなど、一貫して医療安全に取り組んできました。

そして近年、医療技術のめざましい進歩に伴い、現場からのニーズも大きく変貌しつつあります。その中で、テルモは「人にやさしい医療」というビジョンを掲げてきました。

患者さんを救えば良いというだけでなく、医療ミスや事故を減らし、患者さんの「安心」をも確保する。また、検査や手術を通して患者さんが感じる痛みや不快感、身体や精神へのダメージを可能な限り減らす。

これは同時に、医療における「副作用」——ケガや病気そのものではなく、その治療によってできた傷口など——を治すための時間やコスト、またリスクを大幅に軽減するものでもあり、結果として、医療における効率性や経済性を追求することにもなります。

そもそも、医療機器産業は、本質的に「人にやさしい」産業であるというのが私の考えです。その本質を追求し、技術やサービスの向上に努めていくことは、そのまま「人にやさしい医療」の実現へとつながり、社会への貢献にもつながっていくのではないのでしょうか。

多様化する医療ニーズに対応する

「人にやさしい医療」を実現するには、医療従事者に医療機器を正しく使いこなしていただくことが必要です。テルモはそのための実践的トレーニング施設として、2002年にテルモメディカルプラネックス・ウエストを、2007年には同イーストを開設しました。医療従事者に対するトレーニングに加え、より現場に即した医療機器開発の拠点としても活用しています。

このように、製品開発という「ハード」だけでなく、教育などのソフト面を含めた総合的な「ソリューション」を提供していく。また、医療従事者とともにその解決策を探っていく。そうした姿勢は、今後さらに求められるものだと考えています。

製品そのものについても、ニーズはますます多様化してきています。その一つが、高齢化社会、医療費の増加を背景に重要性を増しつつある在宅医療、予防的な医療に関する取り組みです。患者さんやそのご家族が自宅で簡単に、しかも安心して使える医療機器の開発、日々の健康管理に関する正確で的確な情報提供などを通じて、その普及と質の向上に貢献していきます。

また、近年テルモは積極的に事業のグローバル展開を進めており、その観点に立った製品開発も重要な課題です。国や地域の文化、医療事情などによって異なるニーズに合わせ、それぞれに求められるベストの商品を提供していけるよう努めています。

もちろん、持続可能な社会の構築に貢献する企業の一員として、廃棄物をあまり出さないようにするなど、環境負荷の低減に配慮した製品開発が求められていることは、言うまでもありません。安全性確保との両立を高い次元で実現できる開発スタイルを目指していきます。

理念を浸透させ、守り継ぐ

こうしたテルモのさまざまな取り組みの「軸」となっているのが「人材」です。テルモはかねてより、「人を軸とした経営」を経営方針の一つに掲げ、「社員はコストではなく財産である」との考えのもと、仕事を通じて人と会社とがバランスよく成長していけるような企業のあり方を目指してきました。今後、事業のグローバル化がさらに進む中でも、そうした理念は変わらず浸透させていきたいと考えています。

昨年創立85周年を迎え、これからのさらなる発展に向けて変えていくべきこと、そして変えてはならないことなどをまとめ、「テルモのこころ」と題する社員向けの小冊子を作成しました。これは、テルモの考え方を社員全員にわかりやすく伝えとともに、私自身にとってもその理念を改めて確認し、気持ちを引き締める機会ともなりました。

「人にやさしい医療」を実現し、医療を通じて社会に貢献する。その理念を追求し、守り継いでいくことこそが、テルモに課せられた社会的責任です。その思いを新たにしながら、今後もさまざまな取り組みを進めていきます。

2007年7月

代表取締役社長

高橋晃



企業理念

医療を通じて社会に貢献する。

私たちは、医療の分野において、価値ある商品とサービスを提供し、医療を支える人・受ける人双方の信頼に応え、社会に貢献します。

5つのステートメント

- 開かれた経営
私たちは、開かれた経営を基本とし、適正な利潤の確保・還元につとめ、リーディング企業にふさわしいグローバルな事業発展を図ります。
- 新しい価値の創造
私たちは、科学的思考と時間と柔軟な発想を重んじながら、価値ある商品とサービスを創造し、より深くお客様のニーズに応えます。
- 安全と安心の提供
私たちは、誠意とこだわりを持って技術と品質の向上にとりくみ、安全と安心を提供します。
- アソシエイトの尊重
私たちは、個の尊重と異文化の理解を大切に、アソシエイト・スピリッツのもとに、未来にチャレンジする風通しのよい企業風土をつくります。
- 良き企業市民
私たちは、公正な企業活動と環境への責任ある行動を展開し、信頼される企業市民をめざします。

テルモのこころ

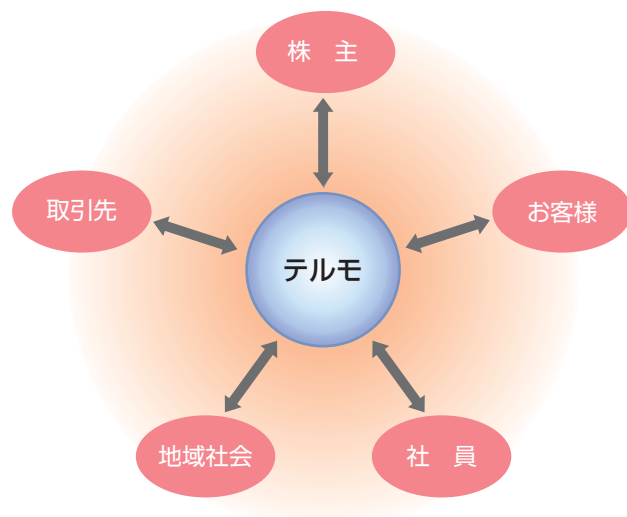
企業の真の価値は、そこで働く人たちが、すなわちアソシエイトの価値の総和であると、テルモは考えます。アソシエイトの集団であるテルモには、創業以来85年あまりの伝統によって培われたテルモならではの考え方や仕事のしかたがあります。それらは他社にはない個性であり、テルモだけが作りだせる価値やブランドの源泉でもあります。

一方で、私たちの社会は常に変化しています。その変化にすばやく対応し、新しい価値を創造し提供することができなければ、企業は存在価値を失い、社会的使命を果たすことができません。

テルモがテルモであり続けるために、変えてはいけないものと、変えて行かなくてはならないものがあるはずで、テルモが未来に向かって決して変えてはいけない最も大切に基本的な考え方と志。それが「テルモのこころ」です。



テルモのステークホルダー

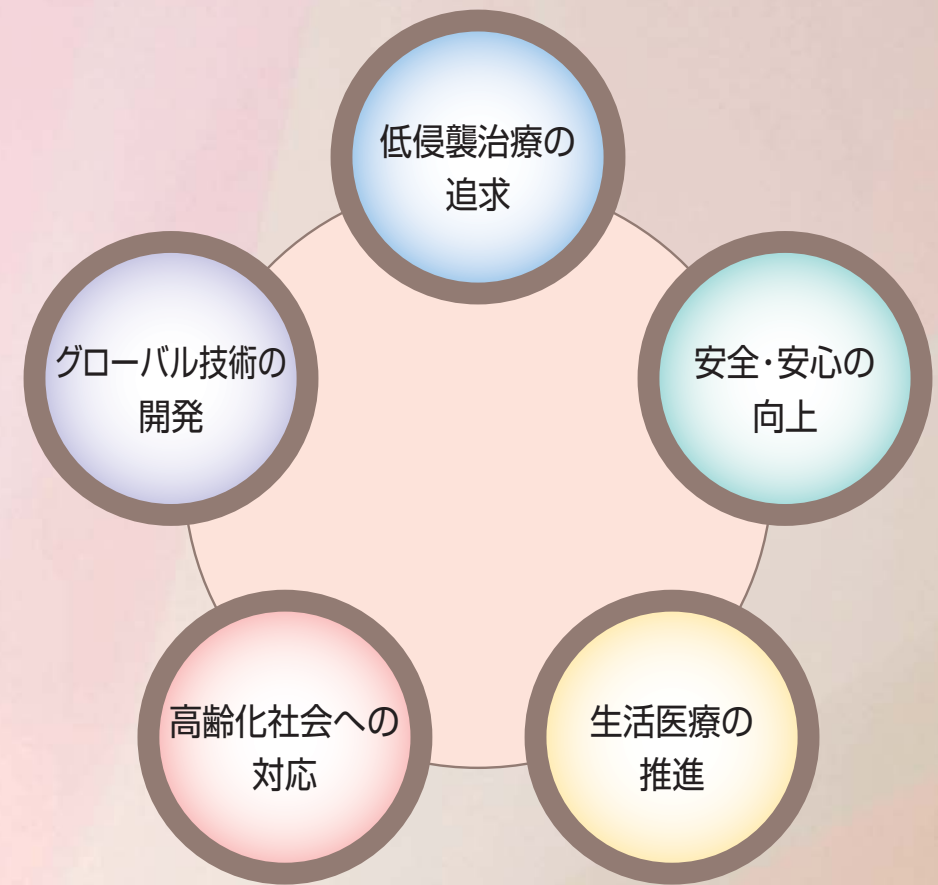


- 株主
良き企業市民として、開かれた経営と公正な企業活動のもと、医療の分野において価値ある商品とサービスを提供することにより企業価値の継続的な向上を目指していきます。
- お客様
医療従事者をはじめとして、患者さんや一般消費者の方など多くのお客様と密接なコミュニケーションを保ち、安全で高品質な商品やサービスの提供を行っていきます。
- 取引先
公正・自由な取引と法令遵守を徹底し、テルモの重要なパートナーである取引先様とともに、安全で高い品質の医療機器・医薬品を提供していきます。
- 社員
社員一人ひとりが能力を最大限に発揮できる職場環境をつくとともに、グローバルに活躍できる人材育成を行っていきます。
- 地域社会
本業を通じたテルモならではの活動で、より良い医療環境の普及に努めるとともに、地域住民のみならず生活や環境へ配慮した取り組みを進めていきます。

特集

「人にやさしい医療」の実現に向けて

テルモの「人にやさしい医療」とは



テルモが、企業活動を通じて実現していくべきビジョンとして「人にやさしい医療」があります。それは、ただ「病気を治す」ことだけを目指すものではありません。患者さんに与えるさまざまなダメージや影響を可能な限り取り除くことで、生活の質を保ちながらの医療を可能にする。それによって、患者さんが安心して快適に診断や治療を受けられる環境を確立する、という考え方なのです。

近年、大きな注目を集めている「低侵襲治療の追求」もそのひとつです。カテーテルなどの新しい技術をグローバルで開発・普及することは、すなわち、一般的な手術に比べて患者さんの身体的なダメージを最小限に抑え、入院期間を短縮し、患者さんの精神的な苦痛や経済的な負担をも低減します。また、痛みの少ない世界一極細の注射針などの開発も、その一環といえるでしょう。

そして、安全・安心の向上。医療従事者のスキルアップも重要ですが、それと同時に、ミスや事故の起こりにくい機器の開発や、医療の効率化を進めることで治療の中に潜むリスクを減らし、医療の安全性を高めることがテルモの役割です。

また、日本においては、近年急速に進む高齢化社会への対応、そしてそれを背景に重要性が増している在宅医療や予防医療など、医療現場を離れた「生活医療」の質の向上が必要です。

こうしたさまざまな角度からの課題解決を通じて、テルモが「人にやさしい医療」を実現していくことが社会からの期待に応えることでもあり、それこそがテルモの歩みを支えているのです。

人にやさしい医療を具現化する ～総合医療トレーニング施設「テルモメディカルプラネックス®」～



医療を通じた社会への貢献 テルモがプラネックスで目指すもの

医療機器を製造して販売するだけでなく、より安全で質の高い、「人にやさしい医療」の実現に取り組んでいくこと。そしてそれを通じて、広く社会に貢献していくこと。それが、医療機器メーカーとしての私たちの責任であり、テルモの果たすべき役割だと考えています。

総合医療トレーニング施設「テルモメディカルプラネックス」は、そうした私たちの理念を具現化する場として、2002年に誕生しました。医療従事者の持つ技術と、テルモが持つものづくりの技



臨床工学技士を対象に、人工心臓システムの操作トレーニング

を融合させ、医療現場にもものだけではなくソフト、サービスの価値も組み合わせたさまざまなソリューションを提供していくことを目指しています。

豊かな自然を背景にした広大な敷地内には、本物と同じ機能や設備を揃えた模擬病院や、最新のトレーニング機器を完備しています。医師や看護師のみならず、薬剤師や臨床工学技士など、多様な医療従事者とそれらを目指す学生への実践的な教育の場を提供しています。

またここは、医療機器開発の拠点でもあります。テルモの社員と医療従事者が、これまで以上にコミュニケーションを深め、現場の潜在的なニーズを掘り起こしながら、新たな機器の開発に取り組んでいるのです。さらに、社員が製品や医療に関する専門知識を高め、医療現場のよりよきパートナーとして活躍していくための教育の場としても活用しています。

こうしたさまざまな取り組みを通じて、医療技術の進歩に貢献するとともに、医療現場に潜む危険やリスクを少しでも減らし、患者さんが安心して、快適に治療を受けられる新しい医療の形を創造し、普及していきたい。テルモはそう考えています。

日常の医療現場に潜むリスクを防ぐ 安全・安心の向上のために

医療の現場には、さまざまなリスクが存在しています。実際に医療事故につながったケースに加え、いわゆる「ヒヤリハット」（医療従事者がヒヤリとした、ハットしたなど、一歩間違えば重大な事故になっていたケース）が日々発生しています。

一方、こうした事故やヒヤリハットの中には、医療従事者のスキルアップやそのためのトレーニング環境が整っていれば、防げた可能性が高いものも多々あります。そこでプラネックスでは、手術室やICU、ナースステーションまでを備えた模擬病院「ホスピタルスタジオ」を施設内に作り、医療従事者や学生に訓練の場を提供しています。



患者さんの急変にも対応できるようなシミュレーショントレーニング

トレーニング実施にあたっては、テルモのスタッフが準備段階からサポート。本物さながらのリアルな病室で、本物の医療機器を使いながら、ヒヤリハットの3割以上を占める注射や点滴などの基本的な手技、患者さんへの接し方などを改めて学ぶことができます。医療事故やヒヤリハットがどのような状況で起こりやすいのかを訓練の中で確認することで、医療従事者自身が自信を持って医療を行えるようになります。これが結果的には患者さんにも安心を与え、安全な医療の実現に寄与するものと考えています。



医師に対し、医療機器の操作方法を正しく説明するためにMRIにも研修を実施

徹底した「気づき」のためのトレーニング

ホスピタルスタジオにおけるトレーニングの、重要なキーワードとなるのが「気づき」です。普段現場で何気なく行っている動作の中にも、数多くのリスクが隠れている。その事実気づくことが、ミスや事故を防ぐ第一歩となるからです。

トレーニングでは、臨床現場を舞台としたチーム医療のロールプレイを繰り返し実施します。その様子をビデオで撮影し、終了後にモニターを通じて客観的な目でチェックすることができます。自分の動作だけでなく、他のスタッフとの連携についても、どこがよくないのか、どこにリスクがあるのかを一つ一つ確かめ、検証していく。それによって、現代医療に欠かせないチーム医療のクオリティを向上させていくことができるのです。

さらに、こうした「気づき」は、製品の開発においても重要な役割を果たしています。医療従事者と開発者がともに医療現場にいる感覚でダイレクトに情報交換ができるのに加え、模擬病院で医

師や看護師にセンサーをつけて動線分析を行うことで、それまで気づかなかった医療現場での課題やリスクを抽出することもできます。



ホスピタルスタジオでは医療現場さながらの環境でトレーニングを実施



トレーニング内容を録画し、振り返り検証する

東京北社会保険病院 副看護部長 山元恵子様のインタビュー 「プラネックスの研修は多くの効果がありました」

効果的で、効率のよい院外研修をめざして プラネックスの活用一

病院にとって、優秀な看護師を育成することは看護部に課せられた重要な課題です。そのためには院内の教育研修体制を整えることが大切となっています。例えば当院では、ベテラン看護師の持つコツ・ワザや今まで行っている看護を、新人看護師にしっかり見せ、伝えた上で、それを実際に安全に効果的に患者さんに適した看護技術として一人ひとりが身につけられるようにプリセプターシップ（新人看護師個別に先輩看護師がついて指導）を始め、ハーフデイバック研修（毎週金曜日の午後の集合研修）などを院内で、3ヶ月間実施しています。

今回、6月に、新人看護師15名と、指導にあたる主任レベルの看護師10名が、基礎技術研修のため、テルモさんのプラネックスを利用しました。研修を受けた看護師が基本的な技術を学ぶことができたほか、ベテラン看護師も、慣習的にやってきたことを研修で改めて指導することにより、日々進歩する看護技術の確認や、自身の看護経験を振り返ることができました。今回プラネックスで行ったような研修を院内で行うには、物理的空間、機材の手配や片付けなどに多大な時間と労力がかかります。当病院のような中規模の病院にとっては、プラネックスを利用することで効率良く研修を行うことができ、とても有効です。そして、



なによりも研修生はじめ指導者も4月からの緊張した気分から空気を眺めながら雄大な丹沢のふもとで、楽しくリフレッシュできました。

各医療機器メーカーがプラネックスのようなトレーニングセンターを作り、業界認定のライセンス取得システムなどを整えることで、看護師がスキルを自発的に磨ける場が増えると、より充実した医療サービスを提供することができるでしょう。テルモさんにはそのような形で業界を引っ張っていくことを期待します。



東京北社会保険病院 副看護部長 山元恵子様



安心して最新の医療技術を導入するために

「シミュレータ」で技を磨く

医療の高度化、複雑化が進む中、医療従事者に求められるスキルのレベルは、ますます高いものになっています。しかし日本ではこれまで、そのための実践的な訓練の場がほとんど用意されていませんでした。

そこで、プラネックスでは、カテーテルを使って血管の中から手術する新しい医療技術を、テルモオリジナルのトレーニング機器を用いて訓練できる「シミュレータゾーン」を設けています。

カテーテル手術は、造影剤を使って血管をエックス線で映しながら診断や治療を行います。かなりの経験を積まないと血管を立体で捉えることができません。ここでは、血管を精緻に再現したシリコン製モデルを使って、実際に目で見ながら訓練を重ねることで、カテーテル手術のスキル習得をサポートしています。



脳動脈瘤治療用コイル操作シミュレータ



脳動脈瘤治療用コイル

また、バーチャル・リアリティでのトレーニングも大変有効です。コンピュータ画面と手元のカテーテル操作ボックスが一体化された最新鋭のシミュレータは、操作感覚も実際の手術により近く、様々な血管の状態を再現することができます。

こうした最新の医療技術の導入と医師のスキルの向上は、治療の効果を高めると同時に、手術時間や治療期間を短縮させ、患者さんへの肉体的、経済的な負担を軽減させることにもつながります。一人でも多くの医師に、最新の技術を習得していただく—それもまた、プラネックスが担う重要な役割なのです。



静脈注射シミュレータ

より実践的な学びと研究の場——プラクティスゾーン

シミュレータゾーンで習得した新しい医療スキルを、実際の医療現場での導入に向けてさらに高めてゆけるのが「プラクティスゾーン」です。最先端の設備を完備した手術室やX線造影室などが用意され、技術を確実なものにしていくためのさまざまな実験やトレーニングを行える環境が整っています。



心臓血管領域を中心とする最新医療技術のトライアルを行うほか、テルモの社員と医療従事者とが協力し、新たな医療機器開発のための共同研究・実験を実施。開発された医療機器の試用と評価も行うなど、新たな医療技術、医療機器の開発・改良に努めています。プラネックスは、テルモと医療従事者とのコラボレーションによって、医療現場に新たな価値を生み出していくための場でもあるのです。

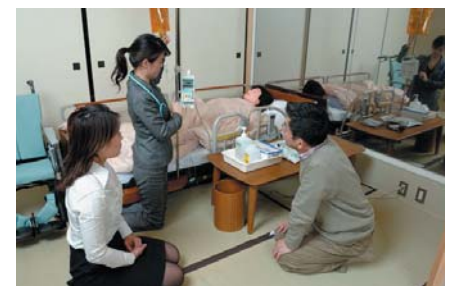


生活医療の拡大への対応

近年、急速な高齢化の進行に伴う医療費の増大などを背景に、「医療＝病院で行なうもの」という図式に大きな変化が起って来ました。家庭での予防医療や介護、セルフチェックの重要性が増し、いわば医療が、生活の一部ともいえるべき存在になりつつあるといえるでしょう。

こうした「生活医療」の拡大に対応するため、テルモでは、プラネックスの中に、腹膜透析や酸素吸入など、在宅医療が必要な方の住まいを模した「模擬居宅」を設置しました。モニターの方にそこで数時間実際に「生活」をしていただき、その様子をカメラ映像などを通じて検証するとともに、ヒアリングを行い、医療従事者だけではなく患者さん自身やその家族が安全かつ快適に使用できるよう、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた医療機器の開発を進め、生活医療におけるミスを防ぎ、安全性や質を高めていきたいと考えています。

模擬居宅ではこのほか、訪問看護スタッフのロールプレイトレーニングなども実施していく予定です。このような生活医療領域は、テルモにとってまったく新しいチャレンジとなります。皆様のご意見もいただきながら、その質の向上に貢献できるよう、さまざまな取り組みを進めてまいります。



家庭で使う医療機器開発を行う「模擬居宅」



モニターの方の様子を外から観察

CSRパフォーマンス(目標と実績)

環境・社会パフォーマンスの項目を充実させ、取り組み結果と自己評価を掲載しています。

今後も継続して環境保全活動や社会貢献活動などを推し進め、責任ある企業市民として情報を開示していきます。

■社会パフォーマンス

評価 ○：目標達成 △：目標を一部未達成 ×：目標を未達成 -：該当なし

取り組み項目	自主目標(中長期目標)	2006年度 実績	評価	掲載ページ	2007年度からの取り組み
コンプライアンスの推進	●コンプライアンス研修継続	●新入社員、中途採用社員、新任リーダーに対するコンプライアンス研修の実施	○	P14	●コンプライアンス研修継続
内部統制への取り組み	●内部統制システムの継続の見直しと整備	●内部統制システムの見直し	○	P13	●内部統制システムの継続の見直しと整備
アクセス性の高いコールセンター	●受信率95%以上、着信応答時間2.5秒以内	●受信率98%、着信応答時間2.65秒	△	P17	●受信率95%以上、着信応答時間2.5秒以内維持
障害者雇用の推進	●障害者雇用率1.8%維持	●2007年3月末現在、1.87%	○	P20	●障害者雇用率1.8%維持
労働安全衛生	●死亡・重大労災をゼロ、労災件数前年度比ダウン	●2006年度死亡・重大労災ゼロ(前年度2件)、その他労災8件(前年度8件) 度数率* 0.51491 強度率* 0.00275	△	P20	●死亡・重大労災をゼロ、労災件数前年度比低減
女性社員の育成	●性差なく能力・業績をベースに育成・登用していく	●女性管理職比率3.1%(2007年3月末現在)	△	P19	●性差なく能力・業績をベースに育成・登用していく
公正な採用の推進	●人種、国籍、性別、宗教、身体など関係なく能力をベースとした採用を行う	●採用担当者の教育、マニュアルの整備	○	P20	●公正採用およびそのための採用担当者の教育を継続

*度数率(労災における死傷者数÷延べ労働時間×1,000,000) ※強度率(延べ労働損失日数÷延べ労働時間×1,000)

■環境パフォーマンス

評価 ○：目標達成 △：目標を一部未達成 ×：目標を未達成 -：該当なし

取り組み項目	自主目標(中長期目標)	2006年度 実績	評価	掲載ページ	2007年度からの取り組み
事業が環境へ与える影響の把握	●開発・生産・営業活動の中で環境に与える影響を定量的に把握する	●環境影響評価の継続実施 ●HCFCの代替について検討継続中	△	-	●環境影響評価の継続実施 ●HCFCの代替を検討継続
環境に配慮した製品	●医療現場での脱水銀 ●欧州規制対応	●医療機関向け電子血圧計の販売促進 ●中国版RoHS指令対応 ●RoHS指令対応製品開発促進 ●台湾電池規制対応 ●使用済み小型充電式電池の回収リサイクル	○	P26 P30 P33	●RoHS指令適合製品の開発と保証システム構築継続
環境汚染の予防	●ジクロロメタンの排出量99t以下を継続	●ジクロロメタン排出量は74トン ●エチレンオキسد敷地境界濃度自主測定実施 ●愛鷹工場にエチレンオキسد排出ガス無害化処理設備増設	△	P28	●ジクロロメタンの排出量99t以下を継続 ●エチレンオキسد排出量の削減目標を検討継続 ●エチレンオキسد敷地境界濃度自主測定継続
エネルギーや資源の有効活用	●2010年度までに、二酸化炭素排出量を原単位で1990年度比25%削減する	●二酸化炭素排出原単位は1990年度比27%削減を達成 ●甲府工場に高効率ターボ冷凍機を導入 ●「チーム・マイナス6%」に参加し、社内エコキャンペーンの実施	○	P27	●自主目標の達成継続 ●海外事業所のエネルギー使用状況の調査
廃棄物の削減	●営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を廃棄物総排出量比1%未満にする	●研究開発センター(研究所)でゼロエミッション達成 ●国内全生産事業所(富士宮工場、愛鷹工場、甲府工場)と本社でゼロエミッション継続 【ゼロエミッション:廃棄物最終処分量が廃棄物総排出量の1%以下】	○	P29	●営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を廃棄物総排出量比1%未満を継続 ●電子 manifests の利用拡大
環境マネジメントシステムの構築	●国内工場と研究開発センターにおいてテルモ環境マネジメントシステムに適合維持	●国内工場と研究開発センターがテルモ環境マネジメントシステムを維持継続 ●国内工場と研究開発センターに対して、遵法監査とパフォーマンス監査を実施	○	P23 P24	●国内工場と研究開発センターがテルモ環境マネジメントシステムを維持継続 ●国内工場と研究開発センターの環境監査を実施する ●国内グループ生産事業所にテルモ環境マネジメントシステムを導入
ボランティア活動の支援	●ボランティア活動の支援	●テルモ富士山森づくりの実施(郷土樹種による自然林再生) ●多摩川クリーン作戦(東京)及び梅沢海岸清掃(神奈川)への参加をはじめとするボランティア支援活動	○	P22	●テルモ富士山森づくりの継続をはじめとするボランティア支援活動継続
環境コミュニケーションの推進	●環境報告書の発行 ●環境月間の取り組み	●2006年社会・環境報告書の発行 ●環境月間の取り組み(国内全工場周辺地域のゴミ拾い) ●環境法関連セミナーを実施 ●社内ホームページで、環境月間特集記事を連載 ●社員参加型エコ活動に1,637名参加 ●日本予防医学リスクマネジメントシンポジウムで講演 ●研究開発センター環境推進委員会、テルモベンポール社(インド)を環境表彰	○	P24	●2007年版社会・環境報告書の発行 ●環境月間の取組 ●社員参加型エコ活動継続
環境法令の遵守	●環境保全に関する法律、条令、協定などの遵守、海外での法令遵守の確認	●米国(2事業所)、インド事業所の現地調査を実施	○	P31	●フィリピン事業所の現地調査を実施 ●REACH等海外化学物質規制への対応

コーポレート・ガバナンス／内部統制

開かれた経営は、欠くことのできない時代の要請です。
 テルモは、公正かつ健全な企業活動を展開するために、
 徹底したコーポレート・ガバナンスと、内部統制の整備に取り組んでいます。

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

テルモは、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念のもと、医療の分野において価値ある商品とサービスを提供することにより、企業価値の継続的な向上を目指しています。同時に、企業理念を具体化するためのステートメント（行動規範）として、「開かれた経営」、「良き企業市民」を掲げて実践しています。

●取締役、取締役会及び執行役員

テルモでは、経営の健全性・透明性向上をコーポレート・ガバナンスの基本におき、取締役会は、13名中3名を社外取締役とし、監督機能の強化と意思決定の質の向上を図っています。また、役付取締役を廃止し、取締役は代表取締役と取締役の2区分とし、主に全社的な経営方針の決定や業務の監督にあたっています。一方、執行役員は、職責に応じた職位に基づき、それぞれの業務執行にあたっています。

経営の透明性と客観性を高める目的から、取締役候補者の推薦及び取締役の業績評価、報酬案について検討する「報酬人事委員会」を社外取締役及び社外有識者を含む体制で設置しています。

●監査役・監査役会

監査役会は社内監査役（常勤）2名、社外監査役2名で構成されています。監査役は、取締役会を含む重要な会議体への出席、重要な決議書類の閲覧などにより、経営に対する監視・監査機能を果たしています。2005年には、専従スタッフを配した監査役室を設置し、監査業務の一層の強化を図っています。

なお、2007年3月付で「取締役等から監査役への報告内規」を制定し、各種事案がスピーディに監査役に報告される体制が整いました。

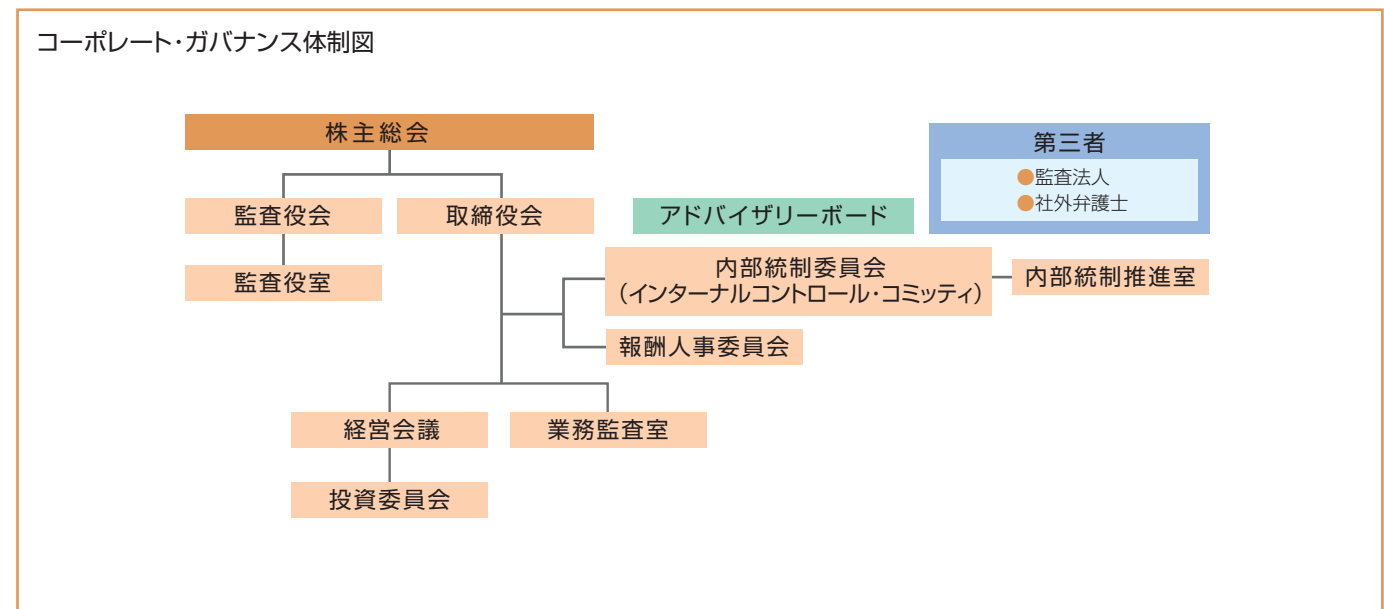
監査役会とほかの監査主体との連携については、内部監査を担う「業務監査室」との月例連絡会を開催しています。また、会計監査人に対しても定例会合の開催を通じて積極的な意見及び情報交換を行っています。

●情報開示体制

代表取締役社長を最高責任者として、関係部署で構成される「ディスクロージャー委員会」が、適時適切な企業情報の開示を推進しております。

●内部統制システムの整備

当社は、2006年5月18日付で、新会社法に基づく「内部統制システムの構築の基本方針」に関する取締役会決議を行いました。同決議の実行については、テルモの行動規範である「テルモ倫理コード」の遵守を事業活動遂行の基本に据え、内部統制決議の実行フォローを含む内部統制全般を審議する会議体である「内部統制委員会（インターナルコントロール・コミッティ）」、及びその事務局を兼ねる内部統制推進室が中心となり、コンプライアンス体制、リスク管理体制、情報の保存管理体制、監査役の実効性確保のための体制、及び国内外のテルモグループを対象とする内部統制システムの整備を進めています。



コンプライアンス

良き企業市民として、社員一人ひとりが「テルモ倫理コード」の精神にのっとり、
 コンプライアンスの徹底に取り組んでいます。

コンプライアンスに関する基本的な考え方

テルモは、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念のもと、医療に関わる企業としての高い倫理観をもって事業を行ってまいりました。これからも、この認識のもと、法令遵守と企業倫理を軸とした公正な事業活動を進めています。

●テルモ倫理コード

テルモは、2000年に、社員の日常の行動規範を定めた「テルモ倫理コード」を制定しました。10項目の具体的なルールに加え、「会社の利益につながる場合であっても、テルモ倫理コードに反すると疑われるような行為をしてはならない」ということを明確にうたっています。なお、今年度より、役員・社員がテルモ倫理コードを遵守していくことの裏付けとして、役員・社員全員を対象に、「テルモ倫理コード誓約書」への署名を開始しました。

●コンプライアンス体制

前述の「内部統制委員会」において、コンプライアンス上重要な課題を審議するとともに、内部統制推進室を設置しコンプライアンス関連部門及び専門部会と連携・協力しながら、教育・研修など、コンプライアンスの推進・徹底に関する施策を進めています。

●企業倫理ホットライン「ロバの耳」

テルモは、「社員全員で会社をよくしよう」「会社の風通しをよくしよう」というスローガンのもと、企業倫理ホットライン「ロバの耳」を2003年1月に開設しました。「テルモ倫理コード」に照らして

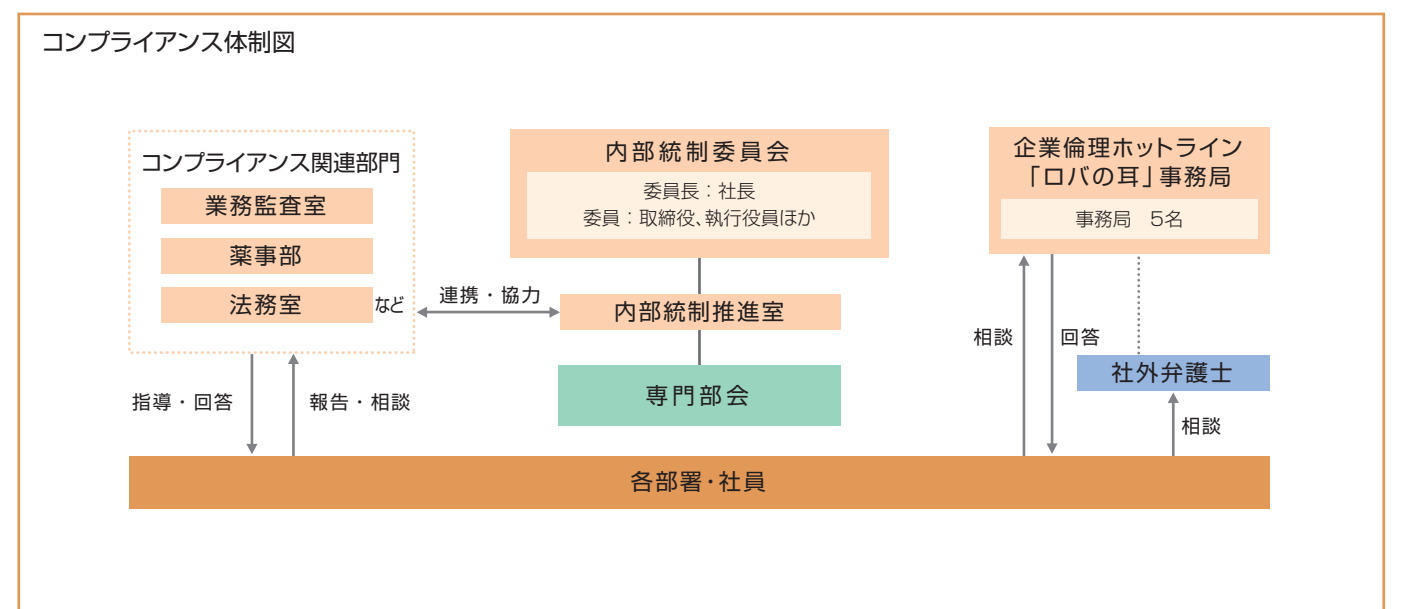
気になる内容、状況があった場合、正社員、派遣社員の区別なく、電話、メール、封書などにより、幅広く相談、連絡をすることができます。また匿名でも利用できる体制とし、「ロバの耳」事務局メンバーである相談員や、顧問弁護士が、プライバシー保護と不利益禁止を徹底しながら、相談者の立場にたって、丁寧に対応しています。なお、現在月平均約2件の相談件数で推移しています。

●生命倫理の尊重

テルモの医療機器・医薬品開発及び評価は、生命の尊厳を第一に考え、関連法や公的指針だけでなく、社内規程を定め、倫理性と科学性の両立を図っています。

研究開発及び製品評価における動物実験では、2005年法改正により明確化された3Rの理念*に加え、4番目に数えられるR、すなわち実験責任（Responsibility）を果たせるよう、社内に委員会を設置して、社員教育、実験計画の審査、適正な実験実施及びその終了確認、動物の適正な飼養・管理・自己点検を実行しています。

*3Rの理念：
 Replacement（動物を使用しない研究への代替）、Reduction（動物数の削減）、Refinement（動物の受ける苦痛の軽減）の3項目を、十分に考慮・検討した上での研究が重要であると、1959年RusselとBurchが初めて提言した。我が国においては2005年、動物の愛護及び管理に関する法律の改正において、その理念が明文化された。



品質への取り組み

テルモは、製品をお客様により安全に、安心してお使いいただくため、製造からサービスまでの全プロセスの品質向上に取り組んでいます。

品質保証体制

1995年に、テルモでは、品質の維持・向上の柱として品質マネジメントシステムを構築しました。起きてしまった不具合への対処だけではお客様の満足は得ることは到底できません。未然に不具合を防止することが、真の品質への取り組みといえます。テルモでは、不具合を未然に防ぐためのシステムの一つとして、ISO13485の認証を取得し、グローバルな品質保証体制で、品質の維持・向上に取り組んでいます。

品質方針

品質マネジメントシステムの構築・実施、その有効性の維持のため、経営者は自ら品質方針を設定しています。また、各部門はこの品質方針に基づき品質目標を設定し、トップの方針が社員一人ひとりの目標に落とし込まれていきます。

品質方針

私たちは、医療の現場に安全と安心をお届けするため、

- **お客様にとって価値ある製品を追求します。**
- **品質システムにおける自らの役割を理解し、実践します。**
- **仕事の進め方を常に見直し、改善します。**

2004年6月30日
テルモ株式会社

代表取締役会長 和地 孝
代表取締役社長 高橋 晃

TERUMO

品質監査

内部監査は、「品質」を維持・向上させるために、品質マネジメントシステムが適切に遵守・運用されていることを客観的に評価します。外部監査ではできない、内部だからこそ知り得る内容を深く掘り下げ、不適合点があれば改善に導きます。

内部監査員の選定には資格制度が導入され、あらかじめ定められた基準に達していなければ内部監査を実施することができません。内部監査は、「品質システム推進委員会」が主管し、内部監査の計画・実施・結果の共有かつ是正処置に関する内容を統括し、事務局から社長へ報告をしています。

また、薬事法をはじめ、ISO13485、欧州医療機器指令、欧州体外診断用医療機器指令、カナダ医療機器規制を遵守していくために、年1回の外部監査を受けています。法規制の状況はグローバルに変化し、年々ハードルが高くなってきており、外部監査の位置付けは重要になっています。

品質向上への取り組み

お客様がテルモの製品を使用するとき、当然ながら、期待する効能・効果を得られることが必要とされます。そして、それを果たすことができ初めて顧客満足につながります。ところが、何か不都合なことが生じてその製品の機能・性能が発揮できない場合があります。なぜ不都合なことが生じたのか、お客様からの情報を分析すると、製造品質の悪いもの、いわゆる“不良品”だけが不都合の原因ではないことが分かります。

お客様の期待に沿った製品を提供しつづけるためには、製造部門や一部の限られた部門が「製造品質」の良い製品を作るだけではなく、お客様への正確な情報提供、使用者のトレーニングやME機器の保守・メンテナンスまで、製品を安全に安心してお使いいただくためのサービスの品質を維持・向上させることも必要と考えています。

これら全てのプロセスにおける「品質」の総合力を高めるためには、モノづくりに直接携わる開発、設計、製造工場はもちろんのこと、マーケティング、販売、本社スタッフなど、あらゆる部門において一人ひとりが品質の担い手であるという当事者意識を持って取り組むことが重要です。

●テルモのこころ

「テルモのこころ」(P5)の中でも「品質」は企業価値を支えるブランドの核として明確に位置づけています。最高の品質をめざして、あらゆる職場において全社員が品質レベルの向上に取り組んでいます。

■一人ひとりの仕事の質が、「テルモの品質」をつくる

テルモが追求する品質は、製造の品質や商品の品質だけではありません。(中略)アソシエイト一人ひとりの仕事の質をすべて総合したものが「テルモの品質」になります。

■より深くお客様のニーズに応える

より安全な医療、より痛みの少ない医療、(中略)医療現場のニーズは多様でかつ時代とともに変化します。たとえどんなに素晴らしい技術を駆使しようと、企業の思い込みだけで作られた商品は、お客様の支持を得ることはできません。

お客様とのかかわり ～医療従事者～

お客様とのコミュニケーションはテルモが企業理念を実現するために最も大切な要素です。

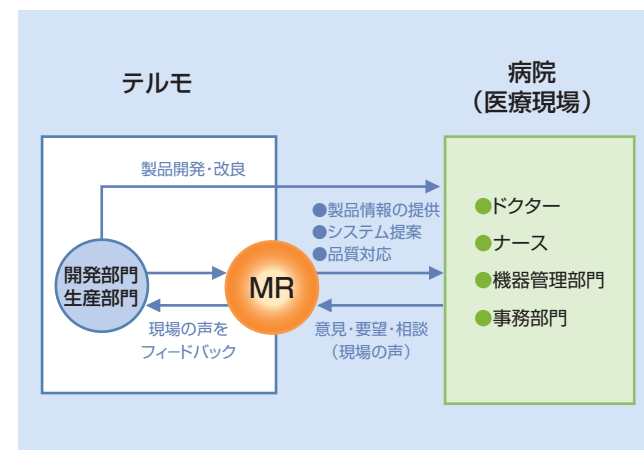
お客様とのかかわりに対する考え方

私たちテルモのお客様は、医療従事者や患者さん、健康や病気に関心のある一般消費者の方々などです。そのようなお客様のニーズを的確にとらえ、必要とされる製品を開発することが、テルモに与えられた大きな役割です。一方、販売した製品を安心してお使いいただくための活動も大切です。お客様とのダイレクトかつ密接なコミュニケーションが、安全な医療の基礎になります。製品開発とサービスの両面から、人々の健康な暮らしに貢献できるよう、テルモは努力を続けています。

医療従事者とMRとのかかわり

医師や看護師など医療従事者とのコミュニケーションを担っているのがMR(メディカル・リプレゼンタティブ:医療機関向けの情報担当者)です。病院を訪問し、テルモの製品を正しくお使いいただくための情報とともに、関連する最新の医療情報もあわせて提供するなど、積極的なコミュニケーションを図っています。また、医療従事者が抱えている課題やニーズを発掘し、社内へ伝え、次の製品開発や改良へ生かす役割も担っています。

最近では、製品に関する情報にとどまらず、医療安全や、医療の効率化といった、医療機関が抱える様々な経営課題にも対応できるような活動も行っています。今後さらに幅広い役割が期待されています。



医療安全と効率化のシステム提案

医療制度改革が進む中、看護師不足が深刻さを増しています。一方、医療の高度化に伴い、医療事故が大きな社会問題としてクローズアップされており、看護師教育などを通じた医療安全の確保は病院経営にとっての重い課題となっています。

このような背景のもと、テルモでは物品の準備業務の大幅な軽減を目的とした「ソリューションパック」を開発しました。「ソリューションパック」は、インダストリアル・エンジニアリングの手法を用いてカテーテル検査のプロセスを詳細に分析し開発したもので、検査に必要な製品を使う順番に並べてワンパッケージ化したものです。

これにより、経験の少ないスタッフでもすばやく正確な準備が可能になり、本来の業務である患者さんへのきめ細かな対応に時間を割くことができます。



ソリューションパック®

MRの声

「お客様に対して商品の紹介をするだけでは、なかなか受け入れてもらえません。医療現場の抱える課題全体を考えた上でどのような提案ができるかを常に考えるようにしています。ソリューションパックを採用いただいた施設では、採用検討のプロセスを通じて、お客様自身が業務改善と医療安全とのつながりを真剣に考えることができたことと評価いただいています。これからも様々な提案を通じて医療現場に貢献していきたいと思っています。」



カテーテルカンパニー関東支店 三浦由美子

お客様とのかかわり ～一般のお客様～

一般のお客様とのかかわり

お客様の声に耳を傾ける——テルモ・コールセンター

●多くのお客様とダイレクトにコミュニケーション

一般のお客様や患者さん、医療機関、代理店のみならず、お客様からの電話によるお問い合わせは、1日約1,500件ののぼりです。これらへの対応を一手に担っているのが「テルモ・コールセンター」です。お客様との直接のコミュニケーションを通してテルモへの信頼を高めていただけるようたゆまぬ努力を続けています。

テルモの製品は、医療機関向け、一般のお客様向け、在宅医療を受けている患者さん向けなど様々です。それぞれお問い合わせの内容や回答に必要な知識も大きく異なるため、それぞれ専門のコミュニケーターが対応しています。テルモを代表してお客様のご要望にお応えするため、新しく着任したコミュニケーターは2



コールセンターの様子

週間から4週間にわたる研修を受けます。その後も定期的なレベルテストや新しい知識を習得するなどの研鑽を積み、お客様にご満足いただけるようコミュニケーションの維持、向上に努めています。特に、在宅医療の患者さんからのお問い合わせなど緊急性が高い分野に関しては、24時間対応する体制を整えています。



電話を通じたお客様への対応でも、常に笑顔で丁寧な対応ができるように、コミュニケーターの前には鏡が配置

●お客様の声を製品にフィードバック

「テルモ・コールセンター」はお客様の質問に的確な回答をするだけでなく、そこから得られた製品ニーズを社内にフィードバックする役割も持っています。お客様から寄せられた声は、開発についての重要な指針として蓄積しています。また、それをもとに定期的に製品開発担当者と検討を行い、お客様の声を具体的な製品開発に結びつけるための活発な議論が行われています。

2005年に発売した家庭用電子体温計「テルモ体温計C220」は、そういったお客様からのご意見を反映して開発された製品です。高齢者でも見やすいよう液晶表示を大きくし、さらに、寝ている赤ちゃんを起こさずに暗い部屋で検温することを想定して、表示部にバックライトが点灯するようにしました。その他、聞こえやすいブザー音の設定や、小さなお子様の眠りを妨げないようブザー音を消すことも可能です。測定時間も高感度センサー採用により、予測検温時間を25秒～40秒へと大幅に短縮しました。このように、お客様の貴重な声を参考に、より使いやすい製品を開発していきます。



お客様の声から生まれたベビーにやさしい機能をもつベビー用体温計

家庭用製品の開発

●「医療」と「家庭」をつなぐ製品を提供

高齢化の進展や医療費の増加などにより、日本において予防医療に対する関心はますます高まっています。また、現代社会においては、メディアでも多く取り上げられている「メタボリックシンドローム」に代表される生活習慣病の方々が増加しています。それに伴い、病院での診断・治療だけでなく、家庭での健康管理の重要性が認識され、家庭での血圧測定データなどを診療に生かす医療側の取り組みも活発になってきました。

テルモは、体温計をはじめ、血圧計、血糖測定器など、予防医療や健康管理に貢献できる製品を提供しています。家庭用電子血圧計「アームイン血圧計」は、医師と同様に血管音を聴いて血圧を測定し、腕を通すだけで簡単に測れる使いやすさも追求して生まれました。また、メモリにより、長期間の継続的な血圧管理もサポートします。さらに「アームイン・メモ」では、家庭で測定した血圧データを蓄積し、その表示部を病院へ持っていけるようにしました。



長期メモリを搭載した「アームイン®・プラス」



「アームイン®・メモ」表示部

長期メモリとグラフ表示ができる「アームイン®・メモ」表示部が取りはずせ持ち運びが可能です。

●人間工学の観点から使いやすい製品を開発

本社とテルモメディカルプラネックスにある居宅を再現した施設を使い、製品をご利用いただく際のお客様の行動を人間工学の観点から分析するなど、使いやすさを追求した製品開発を進めています。

女性用体温計「WOMAN°C」は、朝の忙しい時間に口中で測る女性の負担を少なくするために、形や重さに人間工学の観点を取り入れて開発を行いました。また、お客様である女性に使いやすいと感じていただくために、女性チームによる使い勝手の工夫をきめ細かく製品に取り入れています。このように、製品をご利用いただくお客様に合わせた製品開発に取り組んでいます。



「グッドデザイン賞」や「日経産業新聞賞優秀賞」を受賞したWOMAN°C®



模擬居宅にて、女性体温計のくわえやすさを測定

生活習慣病予防セミナーを開催

生活習慣病を予防するためには、自分自身で健康管理を行うことが大切です。テルモでは、製品の提供だけでなく、インターネットや小冊子、店頭パンフレットなどを通じて、健康に関する情報を発信しています。さらに、2005年度から一般市民の方を対象とした「生活習慣病予防セミナー」を開催し、延べ約4,000名の方が参加されました。セミナーでは、生活習慣病の予防に対する意識を高めるため、専門の医師が高血圧や糖尿病を中心とした生活習慣病についての正しい知識や生活習慣の改善について講演を行っています。これからも、製品だけでなく情報発信活動にも積極的に取り組んでいきます。

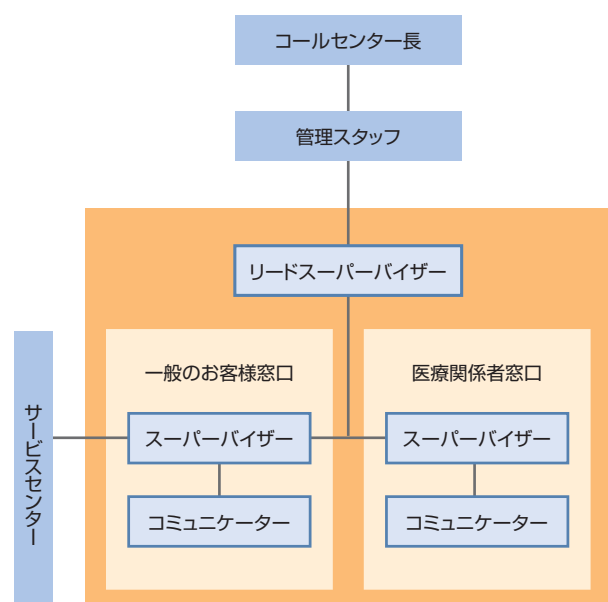


生活習慣病セミナーの様子



会場の様子

テルモ・コールセンター組織図



社会とのかかわり

災害時の医療機器の緊急支援や健康に関する情報発信など、テルモは事業活動に関連する社会貢献を中心に、良き企業市民としての役割を果たせるよう努めています。

社会貢献の考え方

テルモは企業理念「医療を通じて社会に貢献する」とおり、患者さんや医療従事者に優れた製品やサービスを提供することなど、事業活動そのものを通して社会に貢献することがもっとも大切であると考えています。

大規模災害発生時の被災地への医療機器などの緊急支援物資の提供をはじめとして、天気の変化が健康に与える様々な影響や、病気の発症・悪化の予防に役立つ日常生活上の注意報をお届けするテレビ番組の提供など、事業活動の関連分野に関わる社会貢献活動を重点的に展開しています。

さらに、献血や河川清掃、森づくり活動など地域社会における様々な活動にも積極的に参加し、良き企業市民として地域社会に貢献できるような活動にも幅広く取り組んでいます。

病気の予防に役立つ情報の提供

近年、社会における予防医療の重要性に対する人々の関心が増えています。テルモは病気の予防に役立つ情報を提供することで、広く社会のみなさまの健康な生活をサポートすることを目指しています。

●全国各地の健康天気予報を展開

テルモでは、2004年より気象が日々の健康状態や疾病に与える影響を予報する「健康天気予報」をテレビ・ラジオ・ホームページにおいて提供し続けています。2007年からは、関節痛や紫外線など従来の予報内容に加え、新たに天気と血圧の関係についての予報も開始しました。

健康天気予報(テルモホームページ):<http://kenkotenki.jp/>

●健康情報番組「カラダのキモチ」

2006年4月からは新しいスタイルの健康情報番組「カラダのキモチ」をテレビで展開しています。身近な生活上のテーマを取り上げ、健康な毎日を送るためのヒントをお届けする番組で、全国各地の健康天気予報も放送されます。今後もより充実した健康情報の提供を目指していきます。



週刊健康カレンダー「カラダのキモチ」
毎週日曜日 朝 7:00~7:30 CBC/TBS系列 全国28局ネット放送



災害支援

大地震、津波など、自然災害の被災地では、医療機器や医薬品の不足が深刻な問題となる場合があります。テルモでは、被災地への支援活動として医療機器など緊急支援物資の提供を行っています。

●インドネシア・ジャワ島地震

テルモは、インドネシア・ジャワ島地震の被災地域に向け、テルモインドネシア社を通じて関係団体やインドネシア国内の病院と情報を交換し、注射器や輸液セットなど、現地での緊急に必要な医療機器を中心に100万円相当の支援を行いました。

●能登半島沖地震

2007年3月に発生した能登半島沖地震は、石川県では観測開始以降初めて震度6を記録し、大きな被害をもたらしました。テルモでは、金沢統轄支店を通して、輪島市門前町地震対策本部へ栄養補助食品の支援を行いました。

地域社会への貢献

地域社会にどう貢献していくかは、良き企業市民であるための重要な課題の一つです。テルモでは自然環境保全運動や献血など、地域社会への貢献活動を積極的に展開しています。

●中国の医療の質向上への貢献

テルモは1995年、中国浙江省杭州工場(テルモ医療産品(杭州)有限公司)を設立し、1997年より操業を開始、以来杭州市とも大変良好な関係を築いてきました。そして、2007年に操業10周年を迎えたのを期に、中国で3本の指に入る名門大学である浙江大学への「テルモ基金」を創設しました。この活動は、多くの人に医療を学んでいただき、少しでも多くの方が医療の恩恵を受けられることを願ったもので、テルモの企業理念「医療を通じて社会に貢献する」に基づいています。

浙江大学に、テルモは「泰尔茂研究助成基金」により、西洋医学と東洋医学を融合した新しい医療の創造を目指した研究の助成を行うとともに、同大学の優秀な学生に対して、3年間でおよそ300人を対象に奨学育成金「泰尔茂奨学金」を寄贈し、中国の医療の質向上に貢献します。



テルモ基金調印式



浙江大学

「テルモ基金」の概要

基金名 … 泰尔茂基金
基金内容 … 「泰尔茂研究助成基金」と「泰尔茂奨学金」
基金総額 … 年間50万円×3年間=150万円
運営機関 … 2007年~2009年

●テルモ富士山森づくり

テルモは静岡県富士宮市に2つの工場を有し、富士山麓から湧き出る地下水を利用し、医療機器や医薬品などの生産をしています。台風による倒壊の被害を受けた富士山の森林を、災害に強く、地下水の源となる郷土樹種の自然林に再生するため「テルモ富士山森づくり」を、2003年からNPO法人「富士山自然の森づくり」と協力して行っています。

2006年8月、社員及びその家族約100名が参加し、自然林再生に適した坪刈りと呼ばれる作業をしました。これは植栽した苗木や自生した樹木の周りの下草だけを刈り取る方法です。また、参加した子供たちには、自然観察教室などもあり、将来に向かって、富士山の豊かな自然の森づくりに貢献したいと考えています。



2006年8月「テルモ富士山森づくり」の参加者

●ホスピスの患者さんにクリスマスイルミネーションをプレゼント

テルモ湘南センターでは、クリスマスの約1週間前から社員が自主的にチームを組んで建物の壁面にイルミネーションの飾りつけを行い、クリスマスには花火を打ち上げています。これらは、同センターの向かいに建つホスピスに入院されている患者さんやそのご家族、また地域住民の方々にクリスマスを楽しんでいただきたいとの思いからの企画で、1997年より毎年実施しています。



社員が飾りつけをしたクリスマスイルミネーション

●河川・海岸清掃の実施

毎年恒例の「多摩川クリーン作戦」への参加も12回を数えました。地元の野球少年団、地域自治体や法人など様々な方の参加が、総勢1,000名を超えるこの大規模な美化運動については、社内イントラネットニュースなどで紹介し、社員の参加を呼びかけています。また、湘南センター近くの神奈川県二宮町の海岸でも「海岸清掃活動」を実施しています。



多摩川清掃の参加者

●社員への献血の呼びかけ

テルモでは医療に関わる企業の一員として、身近なボランティア活動である献血に関心をもち、社会貢献活動への参加意識を喚起するため、積極的に参加の呼びかけを行っています。2006年度は786名の社員が献血を行いました。

●救命救急活動

毎年100名を超える社員が救命救急講習会を通じて救命救急のスキルを身につけています。一般的な心肺蘇生術などの救急処置に加えて、昨今普及が進む自動体外式除細動器(AED)の操作方法も習得しました。また、工場地区など大規模事業所にAEDを設置し、社内講習会によりスキルアップを図るなど、身近に助けを必要とする人がいた際にすぐに対応ができるよう、いざというときに備えています。



愛鷹工場救命救急講習会



甲府工場救命救急講習会

環境マネジメント体制

テルモが目指すものは、医療の安全と環境の調和です。
1999年、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念のもと、環境基本方針を制定。
医療分野のリーディング企業として地球環境保全に取り組んでいます。

環境基本方針

制定1999年12月

私たちテルモグループは、企業理念「医療を通じて社会に貢献する」のもと、
医療の安全と安心を提供することを基本に、
リーディング企業として責任ある環境保全活動を展開し、信頼される企業市民をめざします。

1. 自主的な目標を設定し、環境保全活動に努めます。
 - 事業が環境へ与える影響の把握 ●環境に配慮した商品開発
 - 環境汚染の予防 ●エネルギーや資源の有効活用 ●廃棄物の削減など
1. 各国の環境保全に関する法律、条例、協定等を遵守します。
1. 環境保全に関する推進体制を設け、推進・監査に努めます。
1. 社会や地域の一員として環境保全活動への支援、協力を努めます。
1. 社内広報活動や教育を行い、社員の環境保全に関する意識の向上に努めます。

環境マネジメントシステム

テルモは、ISO14001の本質である「PDCAサイクル」に絞り込んだ、効率的かつ実効性のある環境マネジメントシステムによって、環境パフォーマンスの向上を目指しています。その活動内容については、社会・環境報告書で毎年公表して、透明性を確保しています。

環境への取り組みは、環境委員会で決定した自主目標に基づき、各事業所単位で推進しています。右の図は、テルモの「環境管理全社推進組織」を表したものです。環境管理の最高決定機関として、環境委員会があり、全社の環境保全の施策と目標の設定、活動状況の把握などを行っています。また環境監査委員会では、各事業所において環境マネジメントシステムが有効に運用されているかを確認する内部監査を担当しており、内部監査の客観性・公平性の維持、独自の監査技術向上に努めています。

環境専門部会は、個別課題について具体的な改善・実行する機能を持っています。

各事業所の環境推進委員会は、環境委員会が決定した方針に基づいて、事業所内での実行計画の立案と活動推進、情報の共有化、教育活動を実施しています。

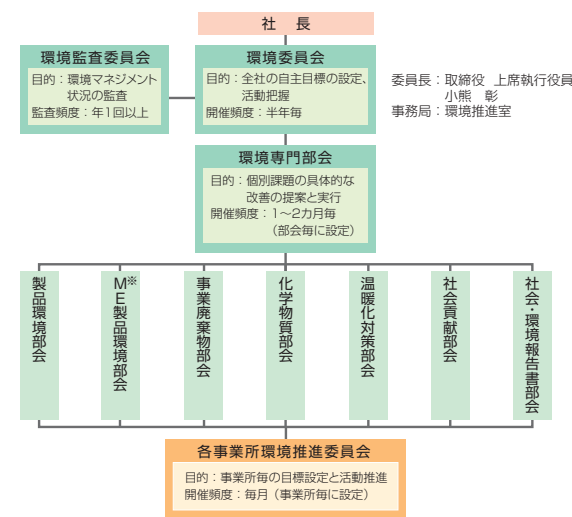
環境委員会委員長からのメッセージ

2006年度、当社は創立85周年を迎え、将来に向かって変えていけない最も大切なものを選び「テルモのこころ」にまとめました。その中で、「地球環境を守ることがテルモの事業活動の前提です」と挙げています。テルモは、さまざまな事業活動で、地球の資源を活用する一方、環境に対する負荷を限りなく小さくするための努力を継続していく必要があります。これからも、この考えを社員一人ひとりの意識の中に浸透させていきます。



取締役 上席執行役員
環境委員会委員長 小野 彰

環境管理全社推進組織



* ME: Medical Electronics (医用電子機器) の略

環境コミュニケーション／環境監査

テルモでは、新入社員研修や内部監査員研修など環境教育を実施しています。
社内環境表彰制度を設け、環境保全活動の啓発に努めています。
また、国内工場や研究開発センターの環境リスクを低減することを目的に環境監査を実施しています。

環境教育の実施状況

●新入社員研修

テルモに入社した新人アソシエイト向けに環境研修を実施しています。研修では、テルモ環境基本方針やテルモの一員として行うべき環境活動について説明を行い、テルモの環境活動について、新人アソシエイトの理解を深めています。



新人アソシエイト向け環境研修

●環境実務者研修

2006年12月、テルモメディカルプラネックスにおいて、省エネルギーセンターから講師を招き、内部監査員及び各事業所エネルギー担当者に対して、改正省エネルギー法及び地球温暖化対策推進法の改正動向を中心とした法規制知識習得を目的とした研修を開催しました。



環境実務者研修

社外講演: 日本予防医学リスクマネジメントシンポジウム

2007年3月第5回日本予防医学リスクマネジメント学会学術総会のシンポジウム「医療安全とコスト、その効率」において、テルモ社員による環境会計の教育講演を行いました。

医療安全の分野では、医療の安全管理にかかるコストを把握し、その効率評価を行う取り組みが行われています。通常業務との区別が難しく、把握しにくいものをいかにして把握するかという点で、医療安全コストの把握は環境会計のコスト把握手法を参考にできるとのことでした。会場からは環境会計のコストの把握事例や環境会計ガイドラインの説明に関心が集まり、活発な議論が行われました。

社内環境表彰

テルモでは、環境保全に関して著しい成果を挙げた施策や活動に対して、1999年度から社内表彰制度を設けています。2003年度からは、テルモグループ全体の表彰制度となり、グローバルに活動を評価しています。



研究開発センター環境推進委員会



テルモベンボール社(インド)

2006年度は、ゼロエミッションを達成した研究開発センター環境推進委員会と、テルモベンボール社(インド)が表彰されました。

表彰年度	表彰名	表彰グループ及び件名
2006年度	ブロンズ賞	研究開発センター環境推進委員会「ゼロエミッション達成」 テルモベンボール社「ゼロエミッション達成」

外部表彰

2006年度、以下の事業所が外部表彰を受けました。

1. 富士宮工場

電気使用の合理化に対する取り組みが評価され、社団法人日本電気協会関東電気協会関東地区電気使用合理化委員会より、「平成18年度電気使用合理化 最優秀賞」が授与されました。



平成18年度 電気使用合理化 最優秀賞

2. 本社(幡ヶ谷)

ビルにおける廃棄物の減量、再利用の促進に関する積極的な取り組みが評価され、渋谷区より、「平成19年度 渋谷区事業用大規模建築物所有者等表彰 特別賞」が授与されました。



平成19年度 渋谷区事業用大規模建築物所有者等表彰 特別賞

内部環境監査の実施状況

テルモでは、法令違反や社会問題などを未然に防止するため、現在から将来における環境リスクを低減させることを目的として、国内工場・研究開発センターを対象に、「環境関連法の遵守」と「環境パフォーマンス」について内部環境監査を継続しています。

●監査項目

- 1) 環境関連適用法令の明確化とその遵法性確認
- 2) 環境リスク管理の状況確認
 - 公害防止組織の遵法性と実行性及び環境管理組織の状況確認
 - エネルギー、大気、水質、騒音、振動、悪臭、電波関連施設、化学物質及び廃棄物管理の確認
 - 近隣住民、行政などからの苦情、指導事項と対応の確認

●監査結果

- 1) 廃棄物管理については、廃棄物処理委託基準において、法令細部の規程で一部不備はあるものの、重大な不備はありませんでした。また、ゼロエミッション(廃棄物最終埋立処分量が総排出量の1%未満)は、監査を実施した全事業所で達成しました。
- 2) 2006年度の事業活動において、環境関連法の違反事例や行政当局からの指導事項はありませんでした。

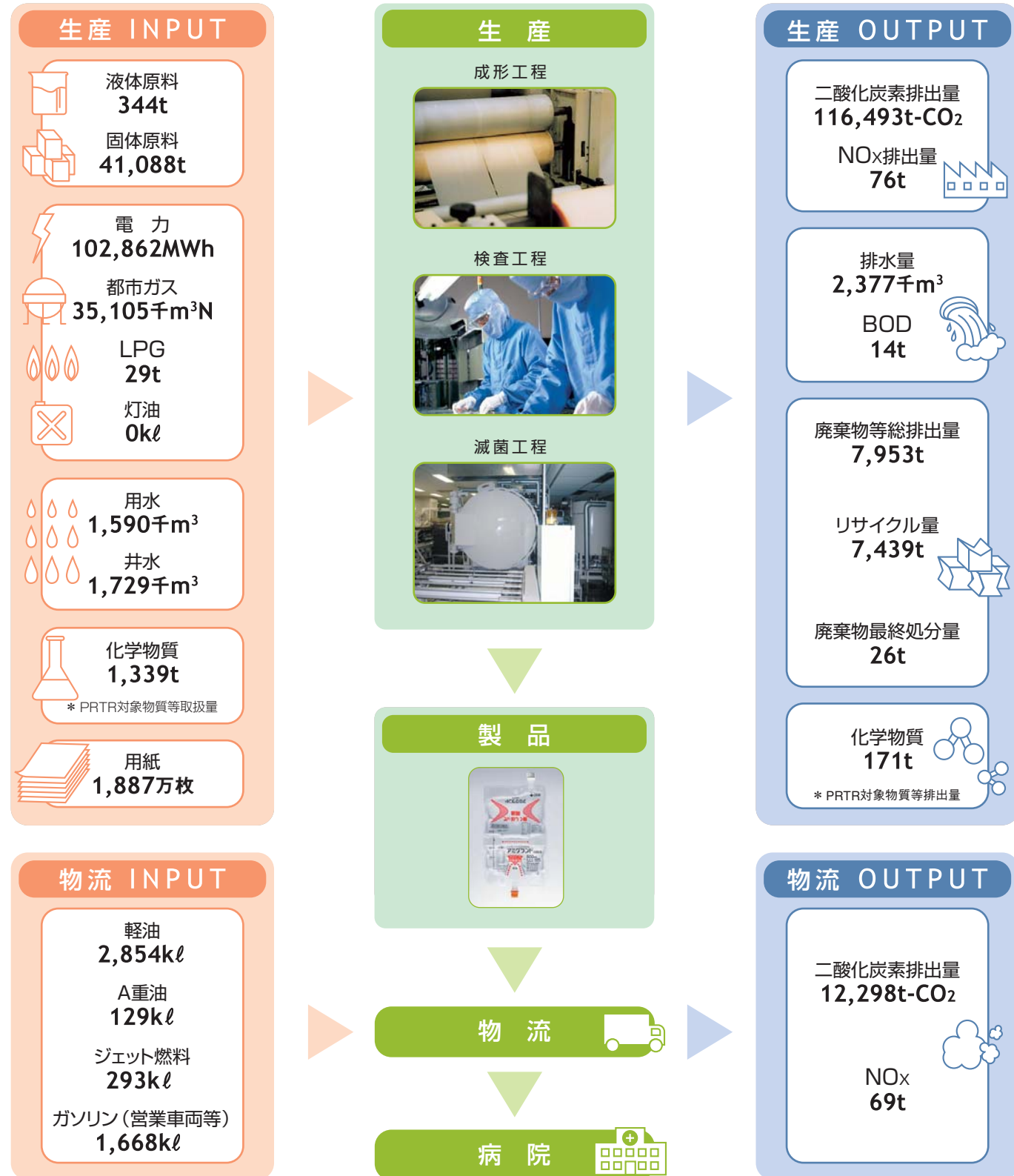


内部環境監査実施状況

事業活動・物質フロー

エネルギーや原材料などのインプットに対し、生産活動の過程で二酸化炭素や排水、廃棄物などがアウトプットされるという環境負荷を把握し、それらの数値を指標とすることで、環境負荷の低減に取り組んでいます。

物質フロー



* 物流におけるNOx排出量は、環境省「環境活動評価プログラム(2002年4月)」の係数を用いて算出しています。
* 物流集計範囲の変更:05年度までは、工場から物流倉庫までを集計範囲としていましたが、06年度から省エネ法の改正に伴って、工場から販売先までを集計範囲を拡大しました。

環境に配慮した製品

テルモの製品は、安全性に配慮した設計と、環境負荷の低減に考慮してつくられています。製品に触れられる医療関係者の方や患者さん、そして地球環境にもやさしい製品開発に取り組み、社会のニーズに応えられるよう努力しています。

ME製品環境部会の取り組み

ME製品環境部会は、電気電子機器に関する各国の環境規制にテルモグループ全体で対応するため、活動しています。メンバーは、ME製品を生産している工場を中心に、分析評価技術を担当する研究開発センター、関連する社内カンパニーで構成しています。法規制の情報や市場の動きをリサーチする法規制・市場調査分科会と、品質保証体制を検討する製品環境保証分科会に分かれ、活動を推進しています。

●RoHS指令適合電子血圧計「エレマーノ®」

電子血圧計「エレマーノ」は、病院で現在主流となっている水銀血圧計に置き換わることで、医療現場の脱水銀を進めることを目的に開発された電子血圧計です。今回さらに環境配慮を進め、鉛はんだなどのRoHS指令の規制6物質を規制値以上含まない製品に変更を行い、2006年7月よりRoHS指令適合機器として出荷を開始しました。

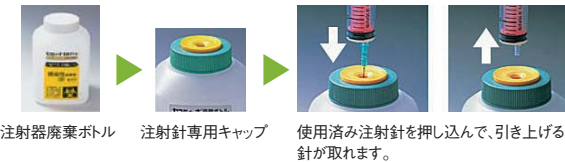


RoHS指令適合電子血圧計「エレマーノ®」

廃棄時の安全性確保

●使用済み注射針廃棄ボトル

肉厚のプラスチックでできた、注射針が突き抜けにくく安全に廃棄できる容器です。専用キャップに交換すれば、注射針を使用後、そのまま注射針を差し込むだけで注射針が取れ、針刺し事故の発生を抑えます。



●環境配慮製品発売のあゆみ

1980年	シリンジ(注射筒)のガスケットを、ゴムから焼却時に硫酸化物を発生しない熱可塑性エラストマーへ変更
1981年	輸液剤容器の材質を塩ビからEVA(エチレン酢酸ビニル共重合体)に変更
1983年	水銀を使用しない電子体温計の発売開始
1989年	ガラス真空採血管を、焼却処理しやすいポリエステル素材のプラスチック真空採血管に切り替え
1991年	非塩ビ製素材のポリブタジエンのチューブを使用した輸液セットの販売開始
1992年	医療現場の環境を考慮し、脱水銀の一環として病院用電子血圧計の販売
1994年	熱可塑性エラストマー素材バルーンカテーテルの販売開始
1996年	新型プラスチック瓶針輸液セットの生産を開始。脱金属針により、病院内分別、焼却の容易化が可能
1998年	シリンジの小型・軽量化を実施。シリンジ廃棄重量を約25%削減
1999年	腹膜透析液容器の材質を塩ビからポリプロピレンに変更し、廃棄重量を40%削減
2001年	非塩ビ製素材の小児用輸液セットの販売開始
2002年	可塑剤DEHPの代替としてTOTMを使用した輸液セットの販売開始
2004年	「高カロリー輸液用総合ビタミン・糖・アミノ酸・電解質液」が「エコプロダクツ大賞推進協議会会長賞」受賞

RoHS(Restriction of the use of certain Hazardous Substances)指令の概要

この指令は、有害物質含有製品の販売を防止することが目的です。この指令で特定された有害物質は、次の6物質:鉛、水銀、カドミウム、六価クロム、PBB、PBDE(臭素系難燃剤)です。2006年7月から、欧州では特定有害物質が規制値以上含まれた製品は販売できなくなりました。

RoHS指令の医療機器への適用は猶予

現在、RoHS指令はカテゴリ-8(医療機器)とカテゴリ-9(監視・制御機器)への適用が猶予されています。欧州委員会から委託を受けた英国の評価機関ERAが代替技術の評価などを行い、2006年9月に最終報告書を公表しました。それによると、医療機器へのRoHS指令の適用は多くの機器で2012年から、体外診断機器は2016年から、能動型植込医療機器は2020年から適用開始、もしくは永久に適用除外とすることを推奨しています。

●血糖測定器用穿刺針

主に糖尿病患者さんが使用している血糖測定器「メディセーフ」は、針(穿刺針)を指に刺して血液を出し、血液を採取して、血中のグルコース濃度(血糖値)を測定するものです。使用済みの穿刺針は、血液の付着した鋭利な物であるため、取扱い方に注意が必要となっています。当社ではこの穿刺針を、穿刺する時だけ針が出る、すなわち装着時・廃棄時に針が露出しない構造にすることで、使用前後の安全性を確保しています。



血糖測定器用穿刺針

地球温暖化防止

2007年4月、国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、「地球規模で目に見える影響を及ぼし始めた」という報告書をまとめた。テルモは、引き続き二酸化炭素排出量削減を推進し、地球温暖化防止に取り組んでいきます。

二酸化炭素排出量削減の取り組み

2006年度、高効率ターボ冷凍機や力率改善用低圧コンデンサーの導入、冷却水ポンプや空調、照明のインバーター化などの削減取り組みを実施したことにより、二酸化炭素排出量原単位削減目標は、達成できました。しかし、輸出増加に伴う生産量の増加によって、国内工場の二酸化炭素排出量そのものは、最近3年間の減少傾向から増加に転じました。今後もさらなる国内生産の増加が予想されますが、空調システムの見直しなどを行い、排出量の削減に努めます。

●甲府工場：高効率ターボ冷凍機の導入、空調用冷水配管連結効果実績
2006年度、甲府工場では、更新時期を迎えた空調用冷凍機をこれまでの吸収式冷凍機から高効率ターボ冷凍機に切り替えると同時に、東地区と西地区の冷水配管を連結しました。その結果、東地区と西地区の冷凍機がそれぞれ単独に運転していた時よりも、よりさらに効率の高い運転が可能になりました。これらの対策により、年間4,400トンの二酸化炭素排出量が削減できました。

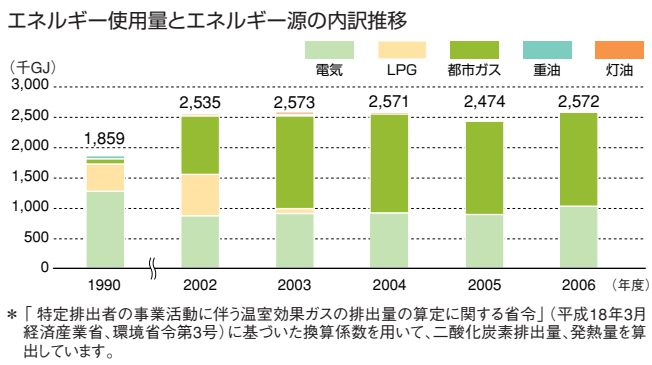
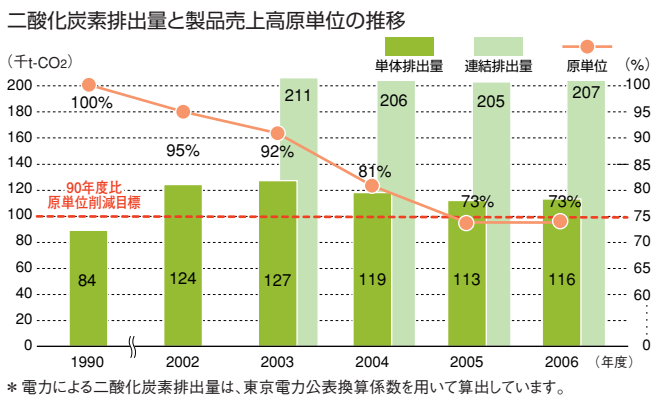


高効率ターボ冷凍機(甲府工場)

●物流の環境負荷削減の取り組み

製品を輸送する際に使用されるエネルギーの削減は、地球温暖化防止の重要なテーマとなってきました。また、日本国内において、2006年4月から、荷主となる事業者に対して、自社の貨物の輸送に関わるエネルギーの削減が義務付けられました。テルモは、輸送効率の高い委託輸送や海上輸送などのモーダルシフトによるエネルギー使用量削減、また物流拠点の統合を行って効率的な物流の取り組みを行っています。改正省エネ法の施行に伴い、2006年度から物流環境負荷データの把握を開始し、環境負荷削減を進めるためにトラック輸送を海上輸送の比率向上や配送車輛の積載効率向上など、荷主として効率的な物流インフラ整備に努め、排出削減に取り組んでいきます。

二酸化炭素排出量削減目標
2010年度までに、二酸化炭素排出量を原単位で1990年度比25%削減



チーム・マイナス6%に参加

テルモは2006年6月より環境省が主催する国民的プロジェクト「チーム・マイナス6%」に参加しています。また7月から10月までの間に全社員とその家族を対象に、工場やオフィスでの省エネ活動はもちろんのこと、家庭でも地球温暖化防止に取り組むエコキャンペーン「ECOチャレンジ2006」を実施しました。キャンペーンには、1,637名の社員とその家族が参加し、「良き企業市民」として地球温暖化防止に取り組まれました。

チャレンジ項目	削減効果 (CO2削減効果の目安(年間))	7/24~8/6	7/31~8/6	8/7~8/13
立会場でエコ				
明かりをこまめに消す。	5kg			
エレベーターを乗らずに階段を使う。	0.02kg/回			
紙を無駄にしない。	2.94kg/kg			
1日5分間のアイドリングストップを行う。	3.9kg			
家庭でエコ				
冷蔵庫の温度を1℃高めに設定する。	31kg			
洗濯機を洗う温度を低めに設定する。	2.7kg			
家族が同じ部屋で眠る。	2.40kg			
テレビ番組を選び、1日1時間テレビ利用を減らす。	1.3kg			
電気製品の電源をコマに切る。	8.7kg			
夜中にポットやジャーの保温を止める。	31kg			
お風呂の残り湯を洗濯に利用する。	1.7kg			
シャワーを1日1分家族全員が減らす。	6.5kg			
明かりをこまめに消す。	5kg			
買い物袋を持ち歩き、各包装の買戻しを減らす。	5.9kg			
1日5分間のアイドリングストップを行う。	3.9kg			
週2日往復8kmの車の運転をひかえる。	1.8kg			
オリジナル・エコ：その他、取り組みがありましたらご自身で設定して下さい。				

エコチャレンジシート

化学物質管理

テルモでは、各工場や研究開発センターで取り扱う化学物質の使用量や排出量を常に把握・管理しています。また、自主的に各化学物質の削減目標を定め、排出抑制、代替を進めています。

化学物質管理の考え方と取り組み

各工場・研究所のメンバーからなる化学物質部会を中心に、化学物質の取扱量・排出量の把握・削減に努めています。PRTR対象物質などの月度単位での把握と発生源からの排出削減を最優先に取り組んでいます。

●エチレンオキシド排出削減の取り組み
2006年度は、従来よりもエチレンオキシドを低濃度まで無害化処理できる触媒酸化処理装置を愛鷹工場に導入したことで、排出量が減少しました。今後は、微量の排出原因であるエチレンオキシドの製品への吸着量を、これまで以上に把握する必要があります。また、2006年度のエチレンオキシドの排出量は吸着量を推定して算出しましたが、引きつづきその精度の検証を行います。



EOG排ガス処理設備

テルモでは、滅菌器や処理装置の排気口での濃度管理だけでなく、製品倉庫など排気口以外からの排出も把握するため、環境基準に相当する自主管理濃度(*)4.3μg/m³に設定し、事業所の敷地境界においてこの濃度を下回るよう管理を行っています。

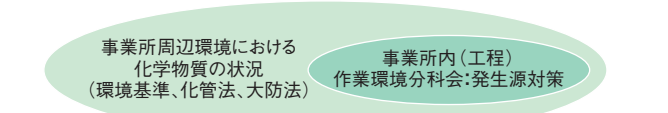
*参考資料：化学物質の環境リスク評価 第2巻(環境省)

●作業環境分科会の取り組み
化学物質については、「化学物質審査規制法」や「化学物質排出把握管理促進法」、「大気汚染防止法」などにより、有害性とばく露を考慮した規制と自主的な取り組みによる環境リスク低減が求められています。

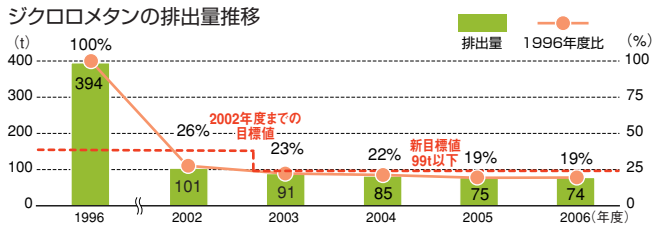
テルモは、化学物質部会に「作業環境分科会」を設け、発生源となる化学物質取り扱い工程の作業環境把握と改善によって、事業所周辺環境における化学物質の状況を改善するという方針で、化学物質の環境リスク低減に向けた取り組みを推進しています。

- 発生源対策
 - 作業環境の状況把握、工程改善に伴う事業所からの排出量の低減とリスクの低い物質への代替
- 揮発性有機化合物(VOC)の自主管理強化
 - コンプライアンスと環境コミュニケーションの実践

作業環境分科会の取り組み範囲



化学物質排出削減目標
ジクロロメタンの排出量を99トン以下



PRTR対象物質及び自主管理物質

化学物質名	量	富士宮工場	愛鷹工場	甲府工場	研究開発センター	合計
エチレンオキシド	取扱量	11.2	39.5	19.4	0.0	70.1
	排出量	2.4	2.0	1.8	0.0	6.2
	移動量	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ジクロロメタン	取扱量	0.0	2.9	116.1	0.0	119.0
	排出量	0.0	1.5	72.0	0.0	73.5
	移動量	0.0	1.4	0.0	0.0	1.4
HCFC-141b	取扱量	53.1	0.0	11.4	0.0	64.5
	排出量	52.2	0.0	9.2	0.0	61.4
	移動量	0.9	0.0	0.0	0.0	0.9
HCFC-225	取扱量	3.4	14.7	3.7	0.0	21.8
	排出量	3.4	5.5	0.4	0.0	9.3
	移動量	0.0	9.2	0.0	0.0	9.2
フタル酸ジ(2-エチルヘキシル)	取扱量	602.7	10.3	409.7	0.0	1,022.7
	排出量	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	移動量	0.0	0.0	16.6	0.0	16.6
トルエン	取扱量	0.8	0.0	3.2	7.4	11.4
	排出量	0.5	0.0	0.9	0.0	1.4
	移動量	0.3	0.0	2.3	2.9	5.5
アジピン酸ジ(2-エチルヘキシル)	取扱量	0.0	0.0	3.5	0.0	3.5
	排出量	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	移動量	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3
フッ化水素	取扱量	0.0	5.9	0.0	0.0	5.9
	排出量	0.0	2.3	0.0	0.0	2.3
	移動量	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
テトラヒドロフラン(自主管理物質)	取扱量	6.8	11.7	2.0	0.0	20.5
	排出量	5.5	10.1	1.6	0.0	17.2
	移動量	1.4	1.6	0.4	0.0	3.4

取扱量合計 1,339
排出量合計 171

*PRTR：化学物質排出移動量届出制度

●PCBの管理
「ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法」、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に従って、PCBを使用したトランス、蛍光灯安定器などはすべて取り外しを完了し、富士宮工場と愛鷹工場の2カ所に集約保管しています。速やかに適正な処分ができるよう、日本環境安全事業(株)豊田事業所に早期登録を完了しています。2006年度はPCB含有トランスが3台あることが新たに判明し、愛鷹工場に追加保管しました。

PCB微量混入が否定できない重電機器375台について、含有分析(メーカー保証を含む)を実施した結果、PCB微量混入が判明した重電機器は23台でした。また密閉構造などにより、サンプリングができず分析が不可能なものが51台ありました。分析不可能重電機器については、今後使用終了後に再分析する予定です。

PCB含有機器保管台数

保管事業所	蛍光灯安定器	コンデンサー	リアクトル	トランス
富士宮工場	459	23	0	0
愛鷹工場	419	17	2	3

廃棄物の削減／水使用量の削減

テルモでは本社・研究開発センター・国内の全工場でゼロエミッションを目指し、
廃棄物最終処分量の削減、リサイクルに取り組んでいます。
また、水使用量の削減にも努めています。

廃棄物の削減

●最終処分量の削減

製造工程や研究開発センター・オフィスでの事業活動では、様々な廃棄物が発生します。テルモでは、2006年度に新たな自主目標「営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量（埋立量）を廃棄物総排出量比1%未満にする」を掲げて、廃棄物対策に取り組んでいます。

2006年度の廃棄物最終処分量は、廃棄物総排出量の0.3%となり、2004年度から引き続き3年連続で目標を達成しました。また、今後も以下の3項目を重点に廃棄物リスクの管理強化に取り組んでいきます。

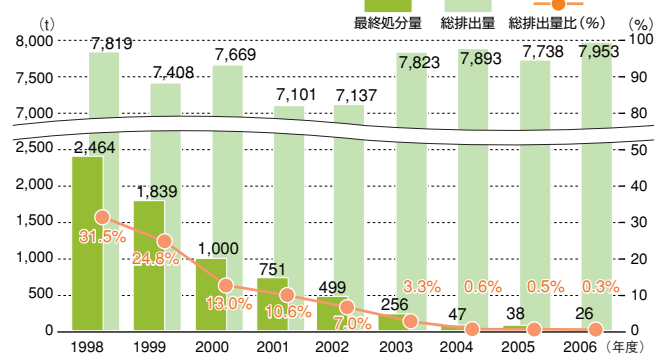
- 遵法性：廃棄物処理法の「委託基準」の遵守
- 削減/リサイクル推進：ゼロエミッションの継続
- 廃棄物リスク管理：適正リサイクルの推進

廃棄物最終処分量削減目標

営業を除く国内事業所の廃棄物最終処分量を廃棄物総排出量比1%未満にする。

*今年度より廃棄物の表記を「総廃棄物量」から「廃棄物総排出量」に統一しています。

廃棄物最終処分量の排出量推移



廃棄物処理委託先の現地確認

廃棄物の外部への処理委託に関して、チェックリストを設けて計画的に収集運搬委託先・処理委託先などについて現地に赴き、適正処理の確認を進めています。また、その結果を環境専門部会の「事業廃棄物部会」において各事業所間で情報の共有化を図って効率的に確認しています。2006年度は26カ所の委託先について、現地確認をしました。



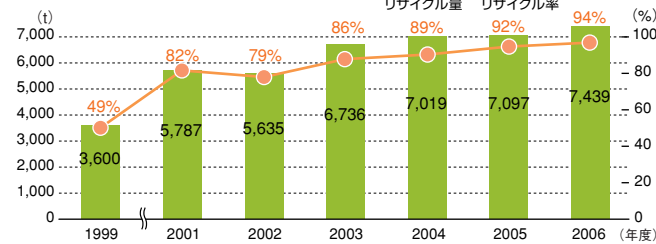
廃棄物処理業者現地確認

リサイクルの促進

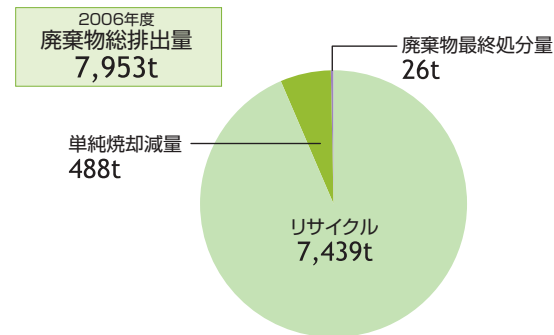
テルモでは製造工程や研究開発センター、オフィスなどから発生する様々な廃棄物を分別収集し、リサイクルしています。プラスチック製の医療用具、医薬品については製品の安全性の観点からリユースは難しい状況にありますが、徹底的に廃棄物を分別することにより、マテリアルリサイクルやRPF（固形燃料）にリサイクルしています。また排水処理施設で発生する有機汚泥は脱水処理を行ったあとに、肥料製造会社で有機肥料に加工され、農家で利用されています。

これらの成果もあり、2006年度のリサイクル率は94%となりました。

リサイクル量とリサイクル率の推移



廃棄物など総排出量（全社）と処理、処分の内訳



国内全ての事業所にてゼロエミッションを達成

2006年度は、テルモの国内全工場と本社に加えて研究開発センターでもゼロエミッションを達成しました。研究開発センターは研究開発を担う組織特有の問題で、実験による廃液・医療系不燃物などが多種にわたり発生することから、その処分が大きな鍵になっていましたが、全員による「45種類の分別廃棄」の実施や、廃棄方法・廃棄ルールの見直しを行うことにより、ゼロエミッションを達成しました。

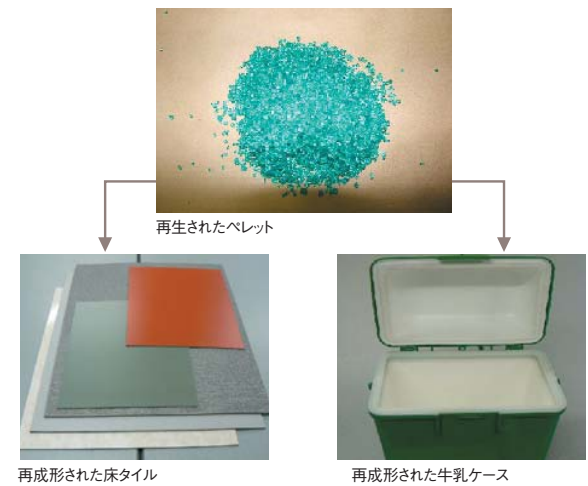
テルモのゼロエミッションは「廃棄物最終処分量を総排出量の1%未満にする」と定めています。



研究開発センター清掃スタッフ

活躍しています！ —テルモの資源ごみ—

例えばテルモの工場で分別しているプラスチック系の資源ごみ。専門のリサイクル業者に引き取られ、そこで再度プラスチックのペレット（小さな玉）へと再生されます。再生されたペレットは、それを加工する業者に引き渡されオフィスや住宅などの床タイルや、宅配用の牛乳ケース、散水ホースなど身のまわりのものに生まれ変わります。テルモは今後も、資源の有効利用に努めていきます。



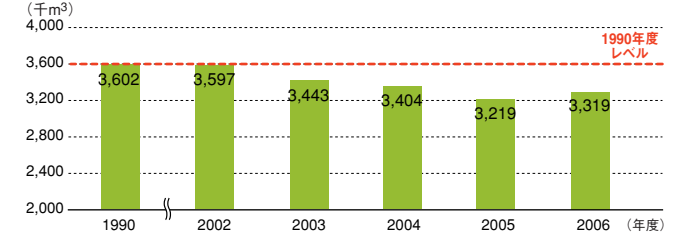
水使用量削減

テルモでは、水資源使用量削減のために冷却水の循環利用、水資源使用の最適化を行っています。2006年度の水使用量は、生産量の増加によって3,319千m³で、前年度に比べて約3%増加しました。今後も生産量の増加を見込んでいますが水資源使用量が1990年度レベルを越えないよう維持していきます。

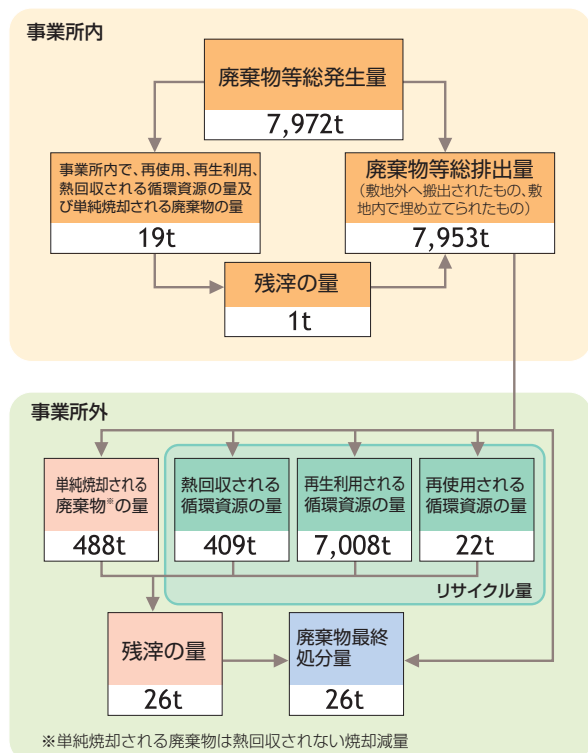
水使用量削減目標

水資源使用量を1990年度レベル以下に維持

水使用量の推移



廃棄物などのフロー図



小型充電式電池のリサイクルに対する取り組み

資源有効利用促進法に基づき、継続して小形充電式電池のリサイクルを実施しています。テルモの商品で発生した使用済み小型充電式電池は、小型充電式電池のリサイクルを推進している有限責任中間法人JBRCにより回収・リサイクルされています。また製品廃棄の際に分別しやすいようにリサイクルマークを表示するなどの工夫をしています。小型シール鉛蓄電池についても、メンテナンス時の電池交換の際に回収・リサイクルを実施しています。テルモは今後も小型充電式電池の回収・リサイクルを継続していきます。



2006年度回収・リサイクル実績 (期間:2006/4~2007/3) (単位:Kg)

ニカド電池	ニッケル水素電池	リチウムイオン電池	小形シール鉛蓄電池
6,382	61	2	347

海外事業所の取り組み

テルモの環境保全活動は日本にとどまらず、アジア、ヨーロッパ、アメリカなどの海外事業所においても積極的に展開しています。各事業所ではエネルギー使用量や廃棄物量などを把握し、資源の有効利用に努めています。

海外事業所の取り組み

●テルモペンポール社でゼロエミッションを達成

テルモペンポール社では、廃棄物の排出部署と処理担当部署の相互理解と協力のもと、廃棄物の分別収集の徹底と排出された廃棄物に破碎・分別などを行うことでリサイクルルートを確認し、工場のゼロエミッションを達成しました。今後は、「節水対策」として機械・設備用や空調用冷却水の循環再利用を計画しています。



テルモペンポール社

●テルモカーディオバスキュラーシステムズ社・アシュランド工場の取り組み

1. 省エネルギー活動

アシュランド工場では、高効率蛍光灯や人感センサー付きの蛍光灯を導入しています。また、従来1台で稼動していた冷却水装置を6台の小型コンプレッサーに分割することによりエネルギーの効率化を図るなど、省エネルギー設備の導入を積極的に行い、エネルギー使用量の削減に取り組んでいます。



高効率冷却水装置

2. 労働安全衛生への取り組み

溶剤を使用する作業工程内では、作業者の手元に排気ダクトがつながったボックス状の囲いを設置しています。溶剤は、揮発を最小限に抑えるため、開閉が容易な小瓶に小分けし囲いの中で使用します。このように、



作業工程内の様子

溶剤蒸気の室内への拡散を防ぐ工夫をするなど、作業環境に十分な配慮をしています。また、2006年度のOSHA（米国職業安全衛生管理局）へのけがや病気の報告は1件でした。労働安全記録の保管状況が平均以上であることで、NSC（米国安全性評議会）より表彰も受けました。



NSCからの表彰

海外事業所現地調査

●テルモペンポール社（インド）

調査担当者：1名（テルモ本社）

環境関連法の遵法状況、エネルギー・廃棄物管理、環境関連リスクについて調査し、指摘事項はありませんでした。エネルギー・廃棄物・排水の環境負荷状況については、行政への定期報告がされており、その他、事業所近隣及び行政当局からの指摘・指導事項はありませんでした。環境関連リスクについては、工場敷地の地歴が把握され、土壌汚染がないことが確認されていました。また、使用中や保管されているPCBもありませんでした。工場棟屋根材の一部にアスベスト含有材が使用されていましたが、使用箇所の把握と廃棄などの対処について確認されており、重大な環境リスクにつながる問題はありませんでした。



テルモペンポール社現地調査

●テルモカーディオバスキュラーシステムズ社・アシュランド工場（米国 マサチューセッツ州）

調査担当者：2名（テルモ本社）

比較的規模の小さい事業所なので、生産に使用する化学物質の管理状況や作業環境管理状況を中心に調査を行いました。その結果、大きな指摘事項はありませんでした。また、環境関連リスクについては、工場敷地の地歴が把握され、土壌汚染がないことが確認されていました。使用中や保管されているPCBもなく、アスベストの使用もありませんでした。結果、重大な環境リスクにつながる問題はありませんでした。

●サイトデータ

テルモは、資源の有効利用とともに環境負荷物質の排出削減のため日々努力しています。サイトデータでは、2006年度の国内および海外の生産事業所の環境負荷データを報告します。

事業所	所在地	CO ₂ 総排出量 ^{*1} (千t)	水使用量 (千m ³)	廃棄物総排出量 (t)	特別管理廃棄物量 (t)	リサイクル量 (t)
富士宮工場	静岡県 富士宮市	45.7	1,716	3,519	11	3,443
愛鷹工場	静岡県 富士宮市	13.7	375	978	97	831
甲府工場	山梨県 中巨摩郡	47.2	1,057	3,111	16	2,897
研究開発センター	神奈川県 足柄上郡	8.3	153	179	53	134
幡ヶ谷本社	東京都 渋谷区	0.9	10	167	0	134
株式会社 医器研	埼玉県 狭山市	0.1	0.5	35	0	7
テルモメディカル社 TCVS社*	アメリカ メリーランド州	24.9*2	75	1,027	87	238
TCVS社*	アメリカ ミシガン州	3.4	7	667	14	218
TCVS社*	アメリカ カリフォルニア州	0.9	5	37	3	8
TCVS社*	アメリカ マサチューセッツ州	0.4	4	195	0	89
テルモヨーロッパ社	ベルギー ルーバン	29.8*2	61	1,200	357	440
テルモヨーロッパ社 UK工場	イギリス リバプール	0.1	0.3	460	0	254
バスケテック社	イギリス グラスゴー	1.5	13	92	6	24
泰爾茂医療産品（杭州）有限公司	中国 浙江省	12.5	616	121	22	82
長春泰爾茂医用器具有限公司	中国 吉林省	2.1	34	152	0	152
テルモフィリピンズ社	フィリピン マニラ	12.5	61	283	21	94
テルモペンポール社	インド ケララ州	2.7	38	377	0	362

*TCVS社:テルモカーディオバスキュラーシステムズ社の略称

*1) 「特定排出者の事業活動に伴う温室効果ガスの排出量の算定に関する省令」(平成18年3月経済産業省、環境省令第3号)に基づいた換算係数を用いて、二酸化炭素排出量を算出しています。

*2) テルモメディカル社・テルモカーディオバスキュラーシステムズ社(メリーランド州)、テルモヨーロッパ社のCO₂排出係数は、供給事業者の排出係数を基に算出しています。

その他の海外事業所については、「特定排出者の事業活動に伴う温室効果ガスの排出量の算定に関する省令」のデフォルト値の排出係数にて算出しました。

テルモ「社会・環境報告書2007」に対する第三者意見



東京工業大学大学院特任教授
駿河台大学大学院教授

水尾 順一

駿河台大学経済研究所長・経営学博士。
(株)資生堂社友、日本経営教育学会理事、
神奈川県保険医協会「治験審査委員会」「倫理審査委員会」外部委員。
著書に『CSRで経営力を高める』(東洋経済新報社)など。

テルモ株式会社(以下、同社)は、『医療を通じて社会に貢献する』ことを企業理念に掲げ「開かれた経営」「新しい価値の創造」「安全と安心の提供」「アソシエイトの尊重」「良き企業市民」の5つのステートメントとして具現化してきました。企業でCSRの実務を推進し、大学でその理論構築をしながら、“理論と実践の融合”を社会に促進してきた立場から、以下に第三者意見を申し述べます。

高く評価できる点

1. 「人にやさしい医療」を提供することへの真摯な姿勢とその行動が適切に情報開示されています。

医療機器メーカーとしての同社のCSR活動は、「医療の安全性を高めること」、そして、急速に進む高齢化社会を背景として在宅医療や予防医療など医療現場を離れた「生活医療」の質の向上が特長となっています。しかもこれらを、病院や医師、看護師なども含めて医療に携わるすべてのステークホルダーと一体になった活動として取り組んでいる様子を知ることができます。それは同社が、病院や医師と異なり、直接的に患者と向き合うことの少ない医療機器メーカーとしての事業領域が主体となっているからです。

具体的には、総合医療トレーニング施設の「テルモメディカルプラネックス」を通じて、医療事故の未然防止やシミュレータによるトレーニングの場の提供、さらにはさまざまな実験やトレーニングが行なえるプラクティスゾーンの提供など、ステークホルダーと一体になって社会に貢献する姿勢が今回の特集を通じてよく開示されています。

2. 「人にやさしい医療」を追求する経営品質について十分に情報開示されています。

経営基盤となるコーポレート・ガバナンスや内部統制、コンプライアンスによる「守りのCSR」がよく開示されています。その上で、「テルモのこころ」が訴求する、テルモらしさを守りそして進化させる「不易流行」の精神をもとにしたメディカルプラネックスや、テルモコールセンターの活動、ISO13485の認証取得に裏づけられた製品からサービスまでのグローバルな品質保証体制、工場現場での環境保全などにいたるまで、本業を通じた「攻めのCSR」がよく開示されています。

今後の改善に期待する点

1. お客さま起点を意識した活動の強化と、その報告が期待されます。

同社のお客さまは、医師や看護師などの医療従事者や患者さまが中心となりますが、それらのお客さまとの対話を通じて、同社がどのように受け止められ評価されているか知ることもCSR活動では重要となります。

東京北社会保険病院副看護部長によるプラネックスの活用所感や、医療従事者とMRとのかわりに関するMRの声、そのほか現場での取り組みなど、ステークホルダーを意識した報告は昨年に比較して、前進しました。

今後は、さらに一歩進めてCS(顧客満足)と言う視点からステークホルダー・ダイアログ(対話)を通じてそのニーズをさらに深堀させることも必要です。常に「解は現場にあり」の精神で、同社が目指すものとステークホルダーが期待するものを事業戦略の中でどのように統合し、新しい価値創造に向けて発展させるかを考えることが一層重要となります。

そのことで医療機器メーカーとして新しい事業領域の創造も可能となり、医療領域全般から世界中の患者さまのQOL(Quality of Life:生活の質)や、生活医療の質の向上に結びつき、さらには同社の持続可能な発展につながるものと考えます。

2. CSR活動の評価と改善活動にアソシエイト(社員)の参画を期待します。

「人を軸とした経営」を掲げる同社だからこそ、この点も今後の重点課題です。

昨年は、女性MRフォーラムの開催、現場の誇り賞の実施、さらにはGET85キャンペーンの展開など、アソシエイトを巻き込んだ活動が進展しました。

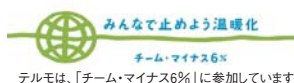
今後は、アソシエイト・スピリッツをもとに、CSRを推進するサポーターなどの設置を通じて、「アソシエイトの目」で考えることがより一層重要となります。例えば、CSR活動に対するアソシエイトの意見や、この「社会・環境報告書」の活用状況、改善案なども含めてCSR活動に対する彼らの理解や要求点を知り、生かしていくべきです。なぜなら、アソシエイトは重要なステークホルダーであると同時に、一方ではこの活動を推進するキーマンともなるからです。

CSR活動が、ES(従業員満足)を達成するスタート地点となり、その結果、CS(顧客満足)の実現に結びつくことを期待してやみません。



テルモ株式会社

〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-44-1
TEL:03-3374-8111 (代表)
<http://www.terumo.co.jp/>



①、TERUMO、テルモ、テルモメディカルブラネックス、ソリューションバック、アームイン、WOMAN'C、エレマーン、メディセーフはテルモ株式会社の登録商標です。

©テルモ株式会社 2007年10月
07T433

■編集方針

本報告書は、主に社会、環境の側面からテルモの事業活動を分かりやすく報告し、社会とのコミュニケーションを促進することを目的に制作しました。

トップメッセージにおいて、「医療を通じて社会に貢献する」という企業理念にもとづき、「人にやさしい医療を目指す」というテルモの姿勢をより具体的に表しました。特集では、「人にやさしい医療」を具現化したテルモメディカルブラネックスを取り上げ、テルモの取り組みを紹介しています。

社会報告には、新たに品質への取り組みの項目を設け、テルモの製品の品質保証方針や体制などを掲載しました。また、2006年度は、継続的にテルモの取り組みを評価していただくために、昨年と同じ有識者の方から第三者意見をいただきました。

なお、環境報告については、環境省「環境報告ガイドライン(2007年度版)」「事業者の環境パフォーマンス指標ガイドライン(2002年度版)」を参考にしております。

■対象範囲

テルモ株式会社(一部海外事業所含む)

■対象期間

2006年度(2006年4月1日～2007年3月31日)
活動には、一部4月以降の内容を含みます。

■発行

2007年10月

■次回発行予定

2008年10月